

菊水町文化財調査報告 第15集

^{まき}の^こ牧野城跡・小^{おと}乙城跡

— 菊水町所在の中世城跡 —

2001年

^{たまなぐんきくすいまち}
熊本県玉名郡菊水町教育委員会

序 文

有名な竹崎季長の『蒙古襲来絵詞』に登場する「ゑたの又太郎ひていゑ」なる人物については、熊本大学名誉教授の工藤敬一先生が「ゑたは、江田で、その名の地は、菊水町江田と考えて間違いあるまい」と推定されています。さらに、この江田氏は、南北朝時代に、南朝方に属しましたが、その後の活動は、知られていないということで、謎の多い武将ということになります。このようなことから、江田を中心として、周囲に所在する中世城跡群については、かねてより強い関心を持っていました。私の知る限り、江田氏の持ち城に関する文献記録は、皆無の状態でしたから、尚更のことでした。

しかし、当該の城跡群は、いずれも雑木山の中に埋没した状態にあり、遺構の観察でさえ、困難な状況にあります。これまでは、昭和50年代初期に県文化課が実施した中世城跡の悉皆調査のみで、結果を記録した調査報告書の縄張り図が全てでした。決定的に資料が不足していたのですが、昨年度から、菊水町で取り組んでいます町内所在の中世城跡調査によって、次々と全容が明らかになっていきますことを嬉しく思います。

今年度調査分の小乙城跡は、地形にもよりますが、小段遺構を中心とした独特の縄張りを有しており、興味深く測量図面を拝見したところです。牧野城跡も、城跡地と集落が一体化したもので、特異な縄張りとなっています。これに、今後、調査を予定しています乙城跡と江田城跡の縄張り図が加わりますと、江田地区一帯の城跡群が全て明らかになります。この中には、きっと江田氏の城が含まれていると確信しています。今春からは、町史編纂事業も始まりますので、徐々に、この疑問点が解明されていくものと期待しています。

最後になりましたが、町教委と共に、この調査に取り組まれている県文化課の大田幸博先生や城郭研究仲間の方々を初めとして、地元世話役の町文化財保護委員の片岡靖臣さん、関係各位に厚くお礼を申し上げます。

平成13年3月30日

菊水町教育長 大 村 繁 技

本文目次

第Ⅰ章 調査の概要	1
第1節 調査の組織	1
第2節 調査の進展	1
第Ⅱ章 調査の成果	3
牧野城跡	3
文献にみる牧野城跡	12
小乙城跡	16
第Ⅲ章 ま と め	31

挿図目次

第1図 菊水町位置図	1	第12図 城跡周辺字図	16
第2図 菊水町中世城跡位置図	2	第13図 小乙城跡周辺地形図	17
第3図 城跡周辺字図	3	第14図 小乙城跡全体測量図	18
第4図 牧野城跡周辺地形図	4	第15図 小乙城跡グリッド設定図	21
第5図 牧野城跡全体測量図	5	第16図 小乙城跡地籍図	23
第6図 牧野城跡グリッド設定図	6	第17図 小乙城跡測量図①	25
第7図 牧野城跡地籍図	7	第18図 小乙城跡測量図②	26
第8図 牧野城跡測量図①	9	第19図 小乙城跡測量図③	27
第9図 牧野城跡測量図②	10	第20図 小乙城跡測量図④	28
第10図 牧野城跡測量図③	11	第21図 小乙城跡測量図⑤	29
第11図 牧野城跡測量図④	12	第22図 小乙城跡測量図⑥	30

写真図版

- 図版1〔牧野城跡〕左：Ⅰ郭－1片隅の墓地 右：高木 輝氏宅
図版2〔牧野城跡〕Ⅰ郭－1から民家を望む
図版3〔牧野城跡〕Ⅰ郭－3からⅠ郭－1・2を望む
図版4〔牧野城跡〕Ⅰ郭－3を南東側から望む
図版5〔牧野城跡〕Ⅱ郭－1の北下にある近世墓地
図版6〔牧野城跡〕Ⅱ郭の法面に残る削り落とし
図版7〔牧野城跡〕Ⅲ郭の法面に残る削り落とし

- 図版 8〔牧野城跡〕 V 郭を南側から望む
- 図版 9〔牧野城跡〕 VI 郭を東側から望む
- 図版10〔牧野城跡〕 VI 郭の南東側を望む
- 図版11〔牧野城跡〕 VI 郭の南下に残る小道
- 図版12〔牧野城跡〕 (伝)姫の隠れ穴
- 図版13〔小乙城跡〕 城跡を南東側から望む
- 図版14〔小乙城跡〕 城跡の南東側
- 図版15〔小乙城跡〕 小張り出し D を南西側から望む
- 図版16〔小乙城跡〕 小段15の法面を北東側から望む
- 図版17〔小乙城跡〕 主郭を西側から望む
- 図版18〔小乙城跡〕 右：小段 1・2 の法面
- 図版19〔小乙城跡〕 小張り出し A を南東側から望む
- 図版20〔小乙城跡〕 小張り出し F-1 から小段36の北東側の法面を望む
- 図版21〔小乙城跡〕 小段24を北西側から望む
- 図版22〔小乙城跡〕 小段24の東端
- 図版23〔小乙城跡〕 小張り出し E-1 を上位北側から望む
- 図版24〔小乙城跡〕 小段23を南東側から望む
- 図版25〔小乙城跡〕 小段13の法面

例 言

1. 本書は、熊本県玉名郡菊水町教育委員会が、平成12年度に実施した中世城跡の測量調査の報告書である。
2. 調査は、平成13年度から計画されている『菊水町史』編纂の先行事業である。今年度は、第2次調査である。
3. 測量調査を実施した城跡は、牧野城跡、小乙城跡の2箇所である。牧野城跡は、江戸時代の文献に、城名と城歴の記載がある。小乙城跡は、文献未記載の城跡で、地名から所在地を割り出した。
4. 測量調査は、大田幸博氏(熊本県文化課・課長補佐)と益永浩仁が行った。大田氏は、町史編纂時に、中世の一部を執筆することになっている。
5. 本書の執筆は、大田氏、石工みゆきさん、溝口真由美さん、益永が行った。
6. 文献調査は、高森荘子さんが行った。
7. 資料整理と製図は、石工みゆきさんと溝口真由美さんが行った。
8. 本書の編集は、大田氏と益永が、溝口さんの助力を得て行った。

第Ⅰ章 調査の概要

第1節 調査の組織

調 査 主 体	菊水町教育委員会			
調査責任者	大村繁技（菊水町教育長）			
調 査 者	大田幸博（熊本県文化課・課長補佐）		益永浩仁（菊水町文化財係主事）	
文 献 調 査	高森莊子（熊本中世史研究会員）			
調査事務局	永井一誠（菊水町教育課長）		坂本政光（課長補佐）	坂口淑子（文化財係主査）
報告書作成	大田幸博	益永浩仁	石工みゆき	溝口真由美
測 量 補 助	片岡靖臣	永田六三子	永田健二	園田政幸

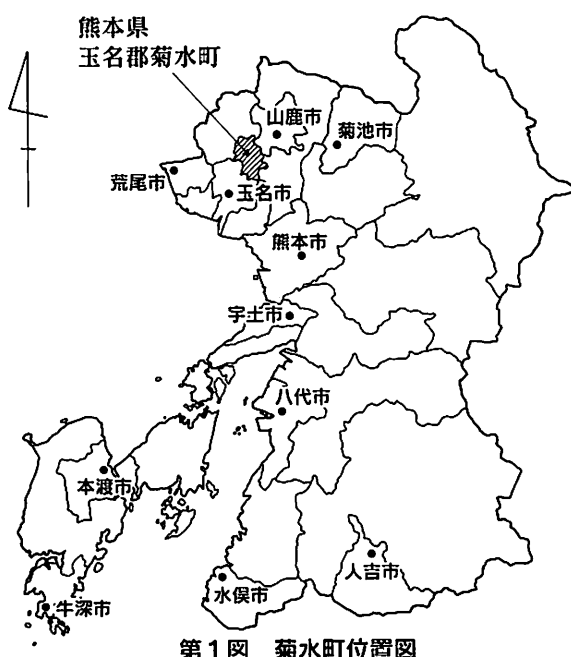
第2節 調査の進展

①^{まきの}牧野城跡と^{こおと}小乙城跡を調査の対象とした。いずれも、大牟田・植木線(主要地方道)の沿線に所在する中世城跡である。同沿線については、昨年度の分を含めると、東方面から西方面へ、^{はぎわら}萩原城跡～^{もてぎ}用木城跡～^{やいごめ}牧野城跡～小乙城跡の順に、調査のメスが入ったことになる。これに加え、昨年度は、玉名・山鹿線(主要地方道)沿線の^{やいごめ}焼米城跡を調査したので、2ケ年で合計5城跡を消化した。しかし、町内の中世城跡は、16城跡の多くを数えるので、今後、さらなる努力が必要である。

②牧野城跡と小乙城跡は、いずれも平山城の部類に属する。牧野城跡は、小集落の西端部が城跡と伝えられる。民家の敷地より、一段高い所で、中心部は、広い平坦地となっている。城の遺構は、ここを中心として、西側へ延びる緩斜面部に展開する。大方は、畑地跡であるが、今日、一部が植林地と墓地で、下草や竹が繁る所である。シンプルな縄張りであるが、荒れ地であったために、環境整備に多くの時間を費やした。

小乙城跡は、文献未記載の城である。昭和50年～52年に、県文化課が実施した中世城跡^{おと}悉皆調査で、初めて所在が確認された。隣接地にあって、古くから知られている「乙城」に関連したものであろう。ヒトデのような格好をした丘陵地に、城跡としての遺構が残っている。何といても、斜面部に造成された^{こだん}小段群は、圧巻である。この城跡は、遺構が細かく分かれていたために、調査に多くの時間がかかった。

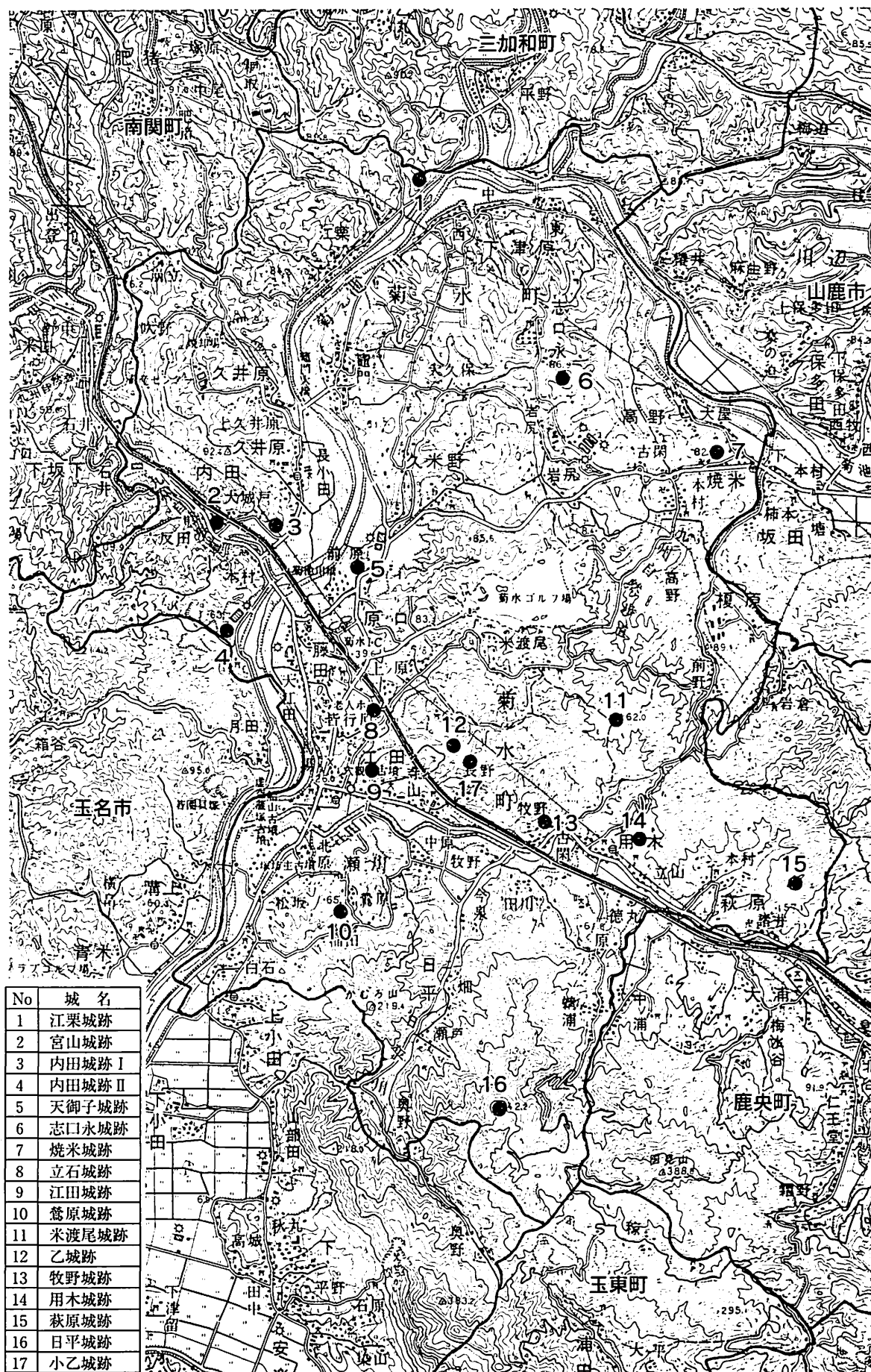
〔益永浩仁〕



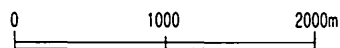
第1図 菊水町位置図

No	城名	所在地(大字)
1	江栗城跡	江栗
2	宮山城跡	内田
3	内田城跡Ⅰ	内田
4	内田城跡Ⅱ	内田
5	天御子城跡	前原
6	志口永城跡	大屋
7	焼米城跡	焼米
8	立石城跡	原口
9	江田城跡	江田
10	鶯原城跡	瀬川
11	米渡尾城跡	米渡尾
12	乙城跡	江田
13	牧野城跡	江田
14	用木城跡	用木
15	萩原城跡	萩原
16	日平城跡	日平
17	小乙城跡	江田

第1表 町内城跡一覧表
(所在地は第2図を参照)



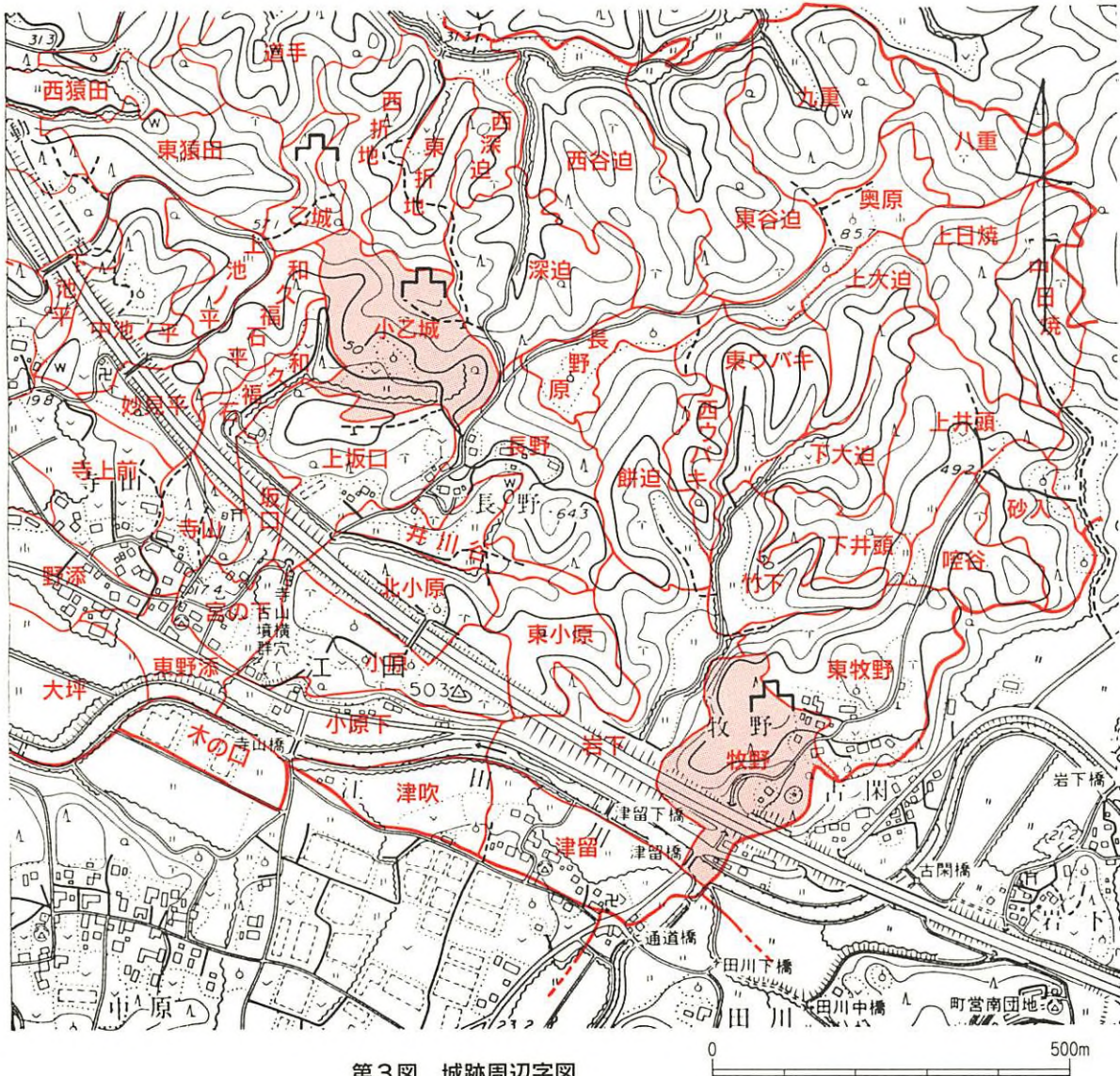
第2図 菊水町中世城跡位置図



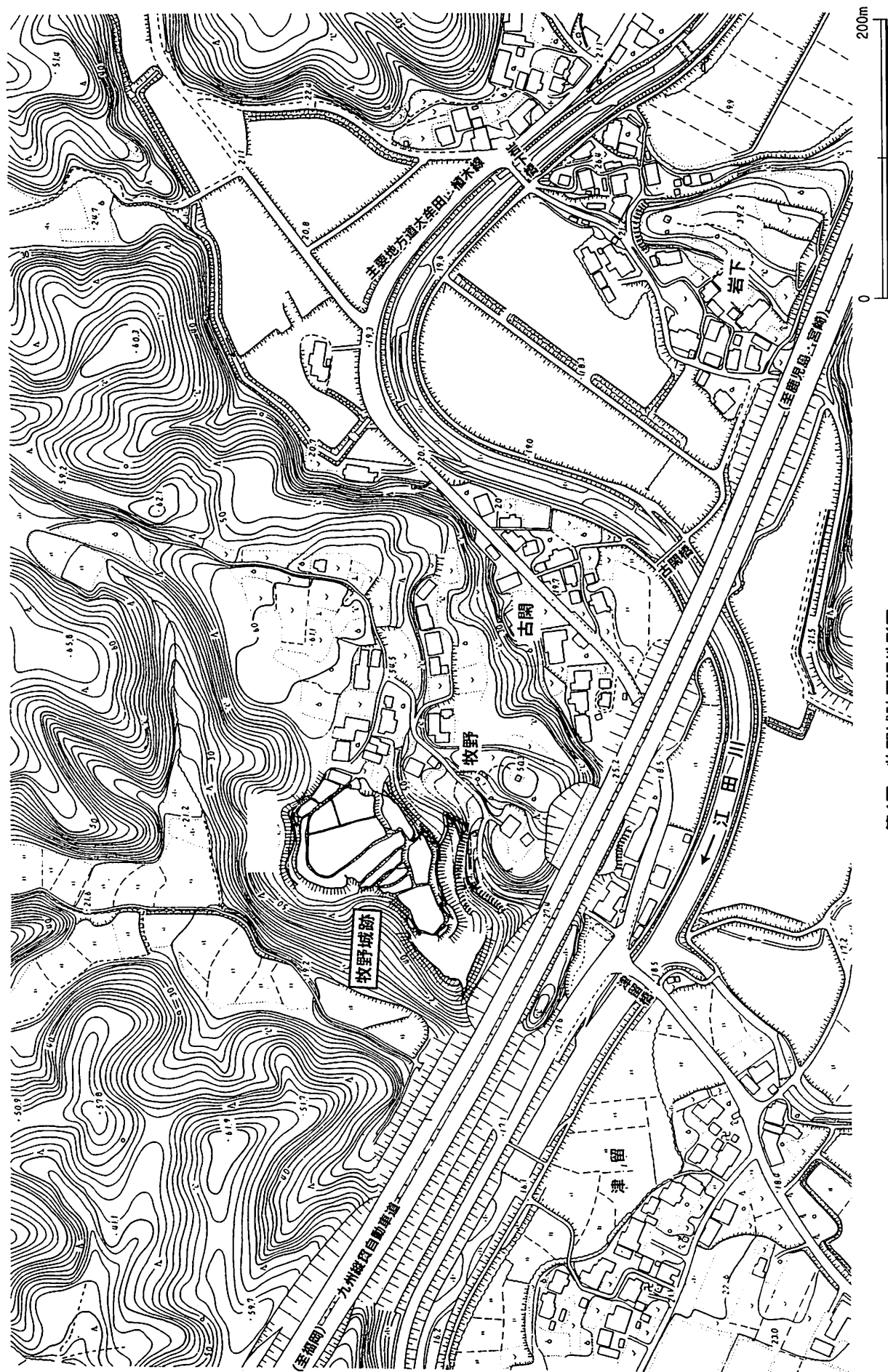
牧 野 城 跡 (菊水町大字江田字牧野)

①江田の十字路から東に折れて、大牟田・植木線(主要地方道)を車で約5～6分程、東進すると、進行方向の右手に橋がある。江田川に架かる津留橋で、ここは、小さな十字路となっており、城跡へ至るには、左手へ折れる必要がある。この脇道は、直ぐに、九州縦貫自動車道のガード下を通り、丘陵への登り道となる。途中には「どんこ坂・とんぐん坂」の呼称を残す箇所や、崖面に湧水地もあるが、2～3分もすると、丘陵の背面部に出る。登り切ったところは、狭い三差路となっており、ここを左折して少し進むと、高木 輝氏宅の庭先で、道が消滅する。

城跡地は、この高木氏宅の西側区画と伝えられる。ここは、居住区域より一段高い所で、広い平坦地がある。牧野城の主郭とみなされるが、今日、積極的な土地利用は無く、城名を記した標本も、根本が朽ちて倒れている(昭和51年11月・町教建立)。丘陵の背面は、西域が(伝)城跡地で、東域に5軒の家屋がある。真の城域は、これらの屋敷域を含むことが、確実である。総じて、民家の庭先が城跡地という感じがする。やや特異であるが、基本的には丘陵の背面にあって、砦と館を兼ねた「総構えの城」と言ってよい。〔溝口真由美〕



第3図 城跡周辺字図

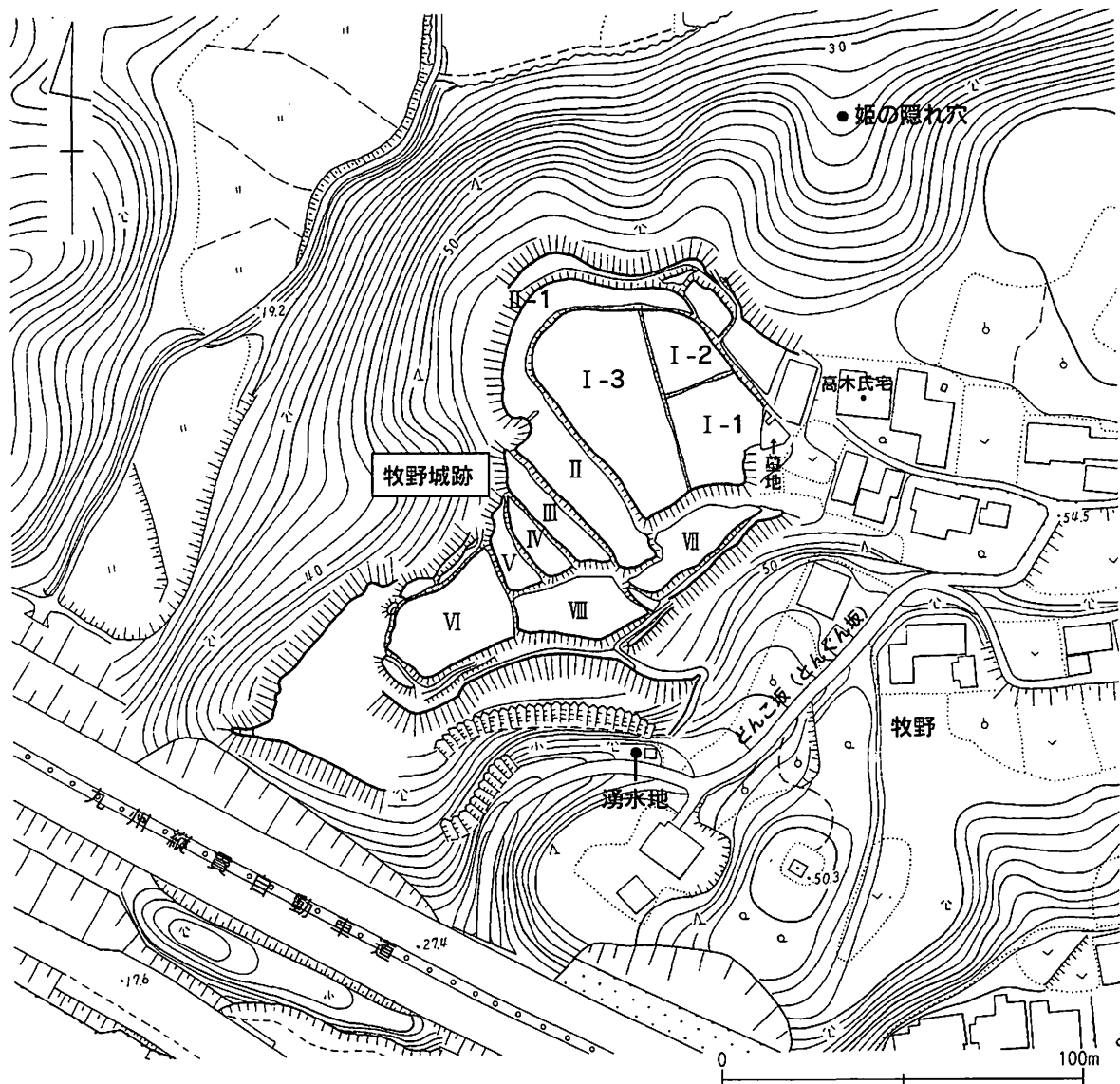


②今日、城跡の遺構は、南西側へ緩やかに下る丘陵斜面部に残っている。背面部の平場下には、主軸方向に合計5段の削平地を数える。各々の法面は、削り落されて、城跡に相応しい景観を呈する。ただし、丘陵の南西真下を九州縦貫自動車道が走行しているので、5段目から下部の様子が不明である。一方、丘陵の南斜面部に残る削平地も、城の遺構である。

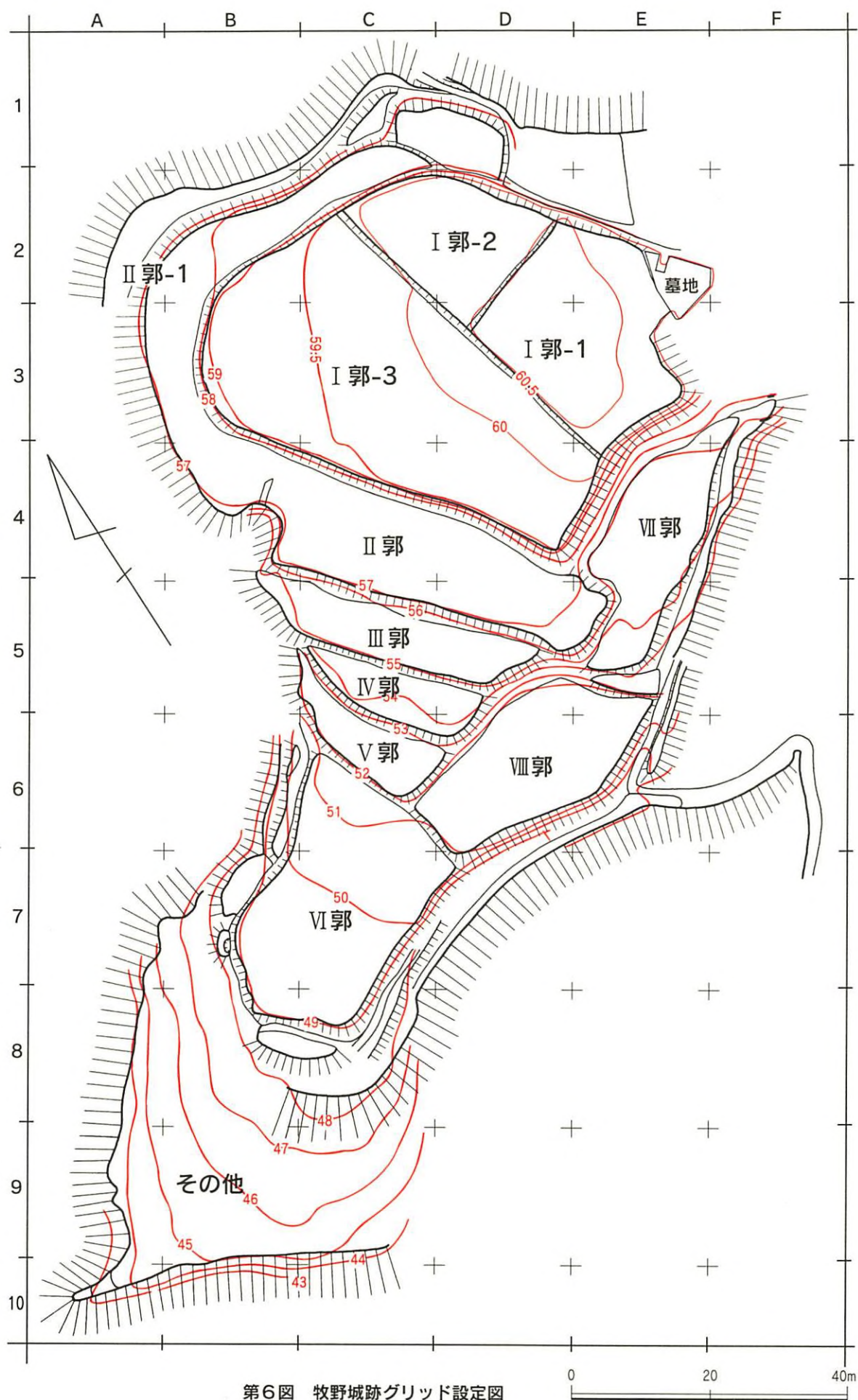
【概 要】

城跡と伝えられる丘陵背面は、広い平坦地となっている。ここをⅠ郭とするが、一様な平場で無く、小さな段によって3区画に細分されるので、Ⅰ郭-1、Ⅰ郭-2、Ⅰ郭-3と枝番を打つ。

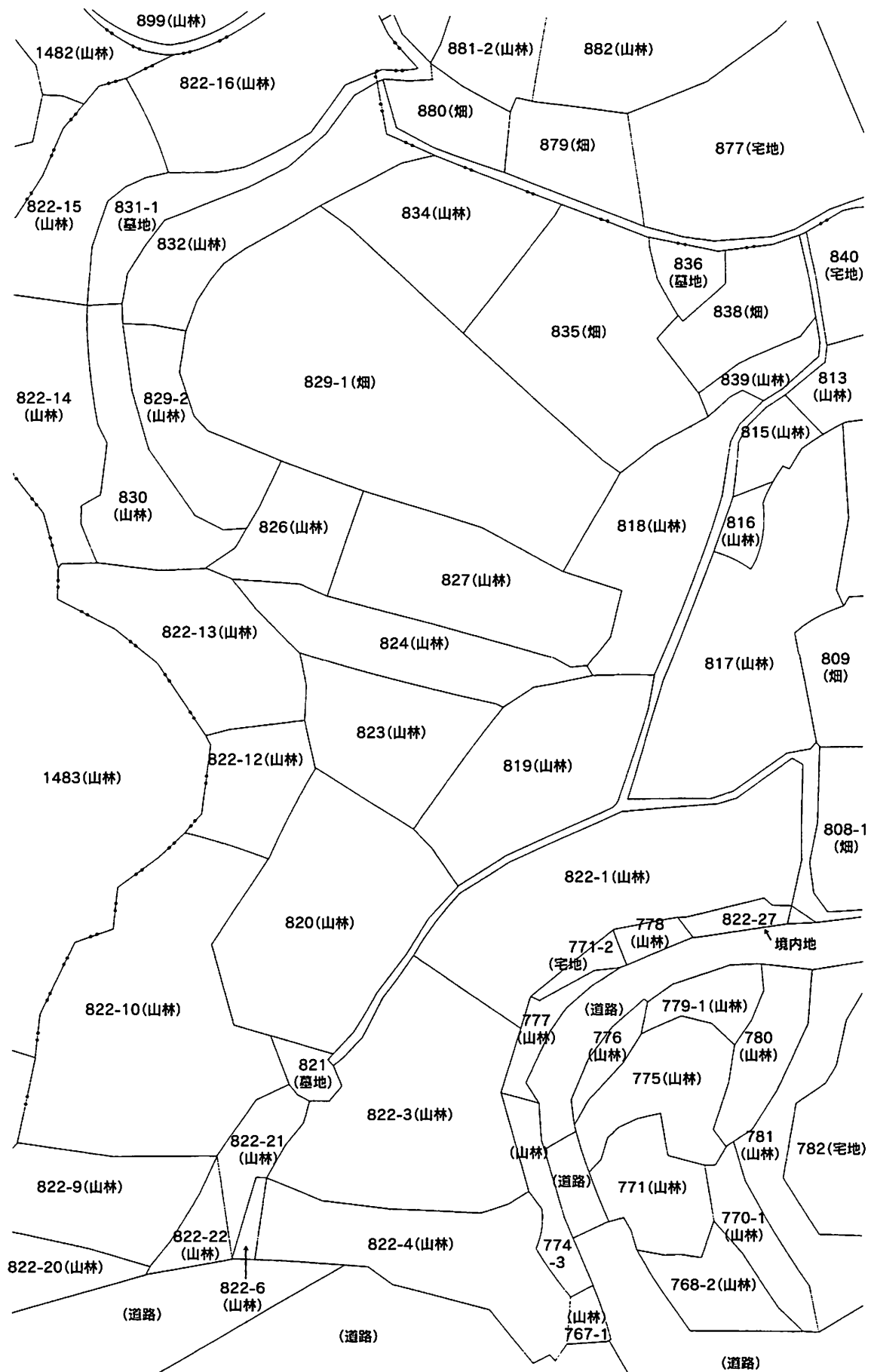
これから、下部の5段は、上段から下段に、Ⅱ～Ⅵ郭とする。一方、丘陵斜面部は、北側の带状削平地をⅡ郭-1とするが、南西端でⅡ郭と繋がり、Ⅰ郭の裾部を半周する格好となる。南側斜面部のものは、東側をⅦ郭、西側をⅧ郭とする。



第5図 牧野城跡全体測量図



第6図 牧野城跡グリッド設定図



第7図 牧野城跡地籍図

〔Ⅰ郭－１〕

城跡の最高所で、標高60.70m。主郭の南東側にあたる。北縁と西縁は、直線をなし、前者20m、後者26m。東下に墓所がある。高木家との比高差は、2.7m。境をなす法面は、削り落されて、直の状態にある。

〔Ⅰ郭－２〕

北端で、標高60.09m。西縁は、Ⅰ郭－１から延びており、長さ26m。Ⅰ郭では、ここだけが、一面の竹林地であった。

〔Ⅰ郭－３〕

主郭の西側区域にあたる。縦長の地形で、長軸60m、短軸は、北縁で最大32m、南縁で15m。中央部の標高は、59.73m。Ⅰ郭－１との比高差は、段差面の真下で、0.5m。

〔Ⅱ郭〕

Ⅰ郭－３との比高差は、1.86m。法面は削り落されている。北西端に、U字形の食い込みがあるが、法面崩壊の痕と思われる。帯状形をなし、長軸48m、幅は、北西端で15m、南東端で11m。Ⅱ郭－１は、Ⅱ郭の延長部分で、Ⅰ郭の北側直下をぐるりと巡る。幅は西端で、10.5m、中央部で8.0m、東端で、鋭角三角形形状にすぼまる。Ⅰ郭－３との比高差は、中央部で、1.45m。北下の一部が、近世墓地となっている。

〔Ⅲ郭〕

中央部で、Ⅱ郭との比高差は、2.28m。上位から見れば、細長の逆台形を呈する。短軸29m、長軸42m、幅7.0m。法面は削り落されている。

〔Ⅳ郭〕

Ⅲ郭との比高差は、1.24m。半月状を呈し、長軸26m、最大幅は、南東端で7.0m、北西端で、鋭角三角形形状にすぼまる。

〔Ⅴ郭〕

Ⅳ郭との比高差は、1.39m。平面形状は、Ⅳ郭と似かよるが、北西側で、歪となる。長軸は、やや弯曲するが、26mの範囲に収まる。

〔Ⅵ郭〕

長軸36m、短軸は、東端で26m。西端は最大幅21m。舌状形をなして、すぼまる。平地であるが、東側から西側への緩傾斜地で、比高差は、1.44m。Ⅴ郭との比高差は、Ⅵ郭の中央部の東端で、1.42m。北縁下に小さな帯状の小段が付く。比高差は、0.68～1.29m、幅は、1.0～4.0m。Ⅵ郭は、形状からして、Ⅱ～Ⅴ郭とは性格が異なり、建物が存在した可能性がある。

〔Ⅶ郭〕

Ⅰ郭－１・３とⅡ郭の南縁下に位置する。平地で、長軸42m、幅は、中央部で13m。この箇所でのⅠ郭－３との比高差は、4.54m。形状は、歪で、北東端は、鋭角三角形形状にすぼまる。南西端は、Ⅱ郭の南東端が食い込んでおり、ここでの比高差は、2.4m。

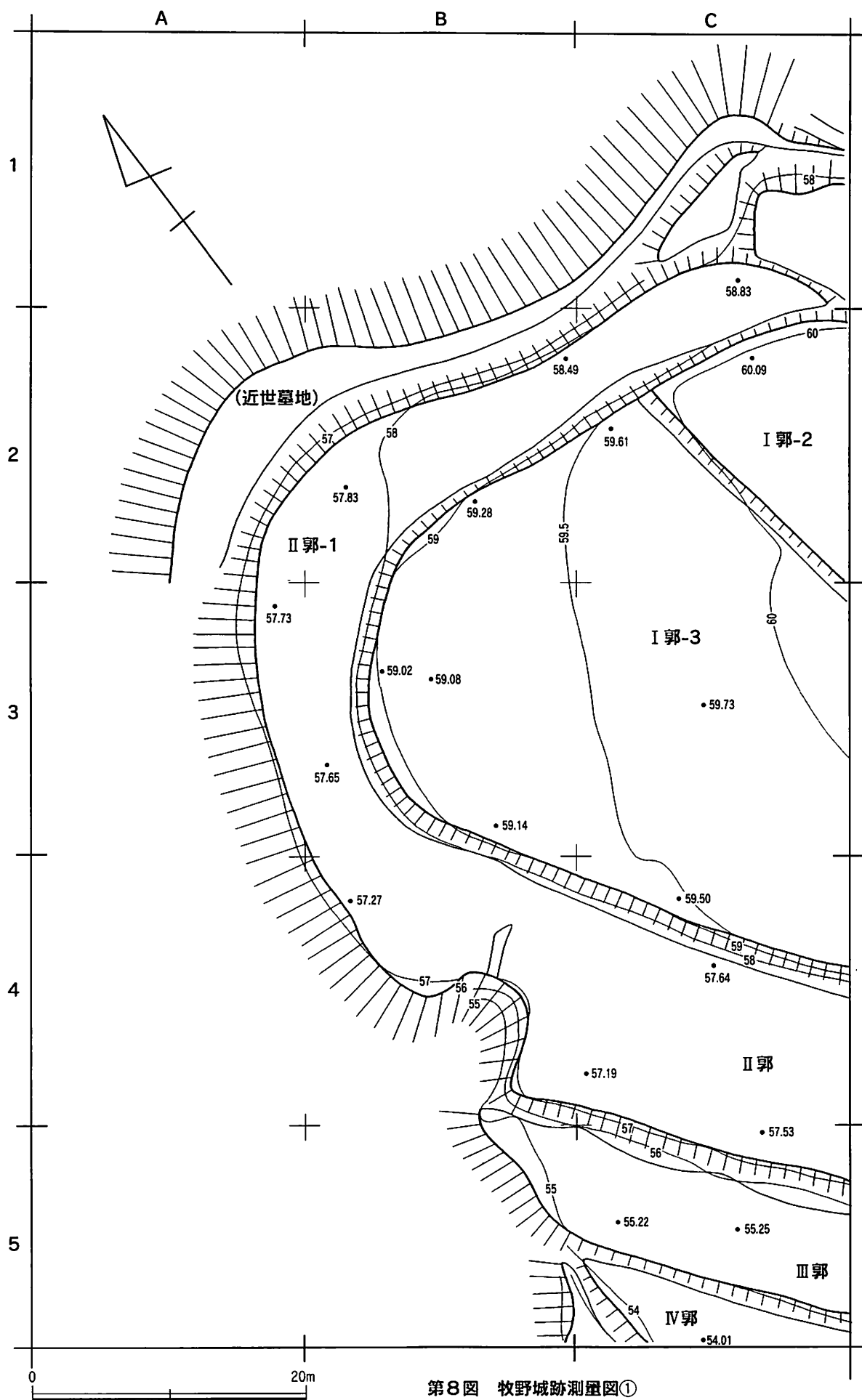
法面は、削り落されている。この郭の南西下には、小段が付いている。比高差1.69m、長さ10m、幅は東端で最大4m、西端は、鋭角三角形形状にすぼまる。

〔Ⅷ郭〕

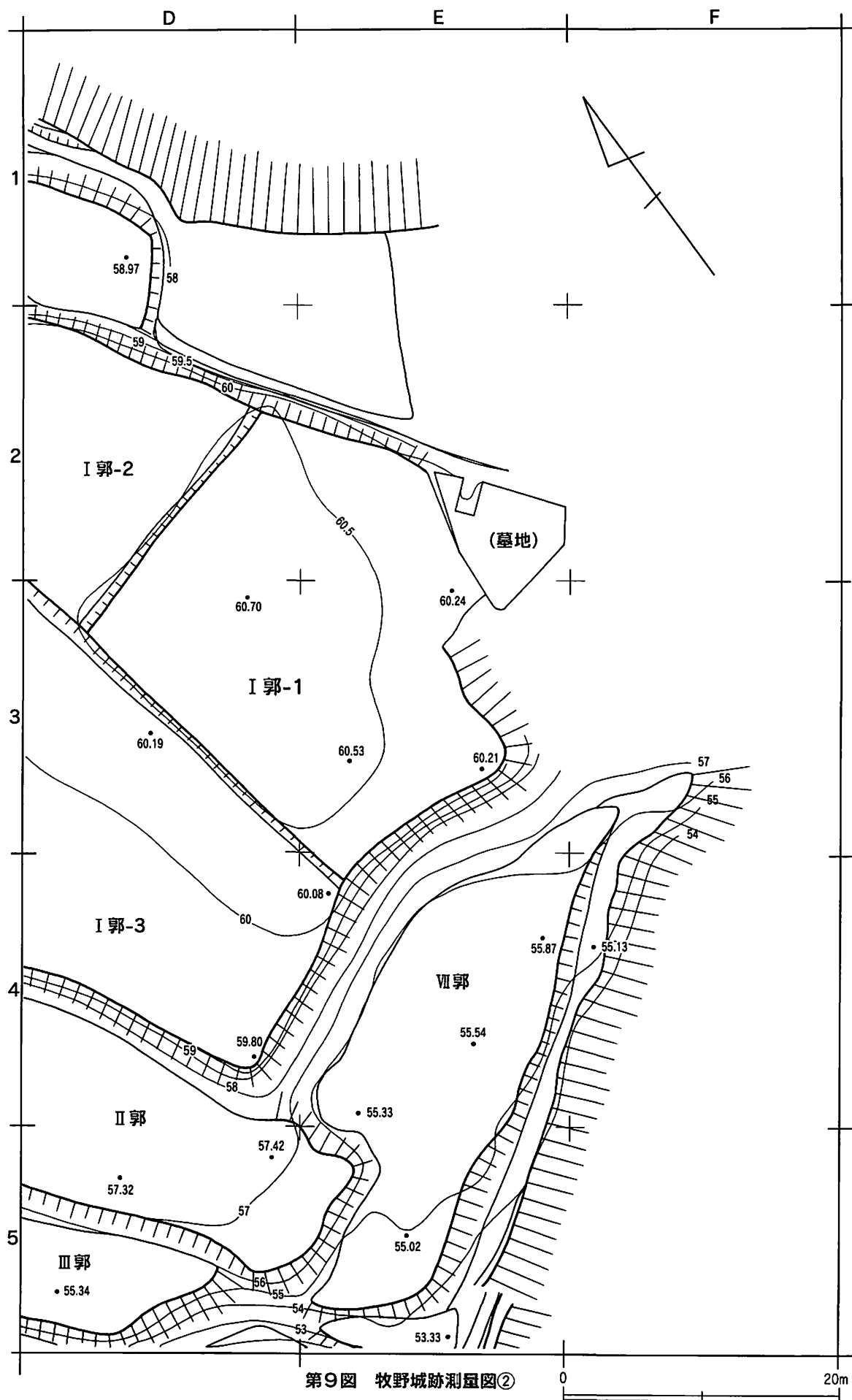
Ⅲ～Ⅴ郭の南縁下に位置する。Ⅶ郭と同様の平地で、長軸37m、幅は、最大で18m、西端は10m。東端は三角形形状にすぼまる。Ⅳ郭との比高差は、2.37m。法面は、削り落されている。

〔その他〕

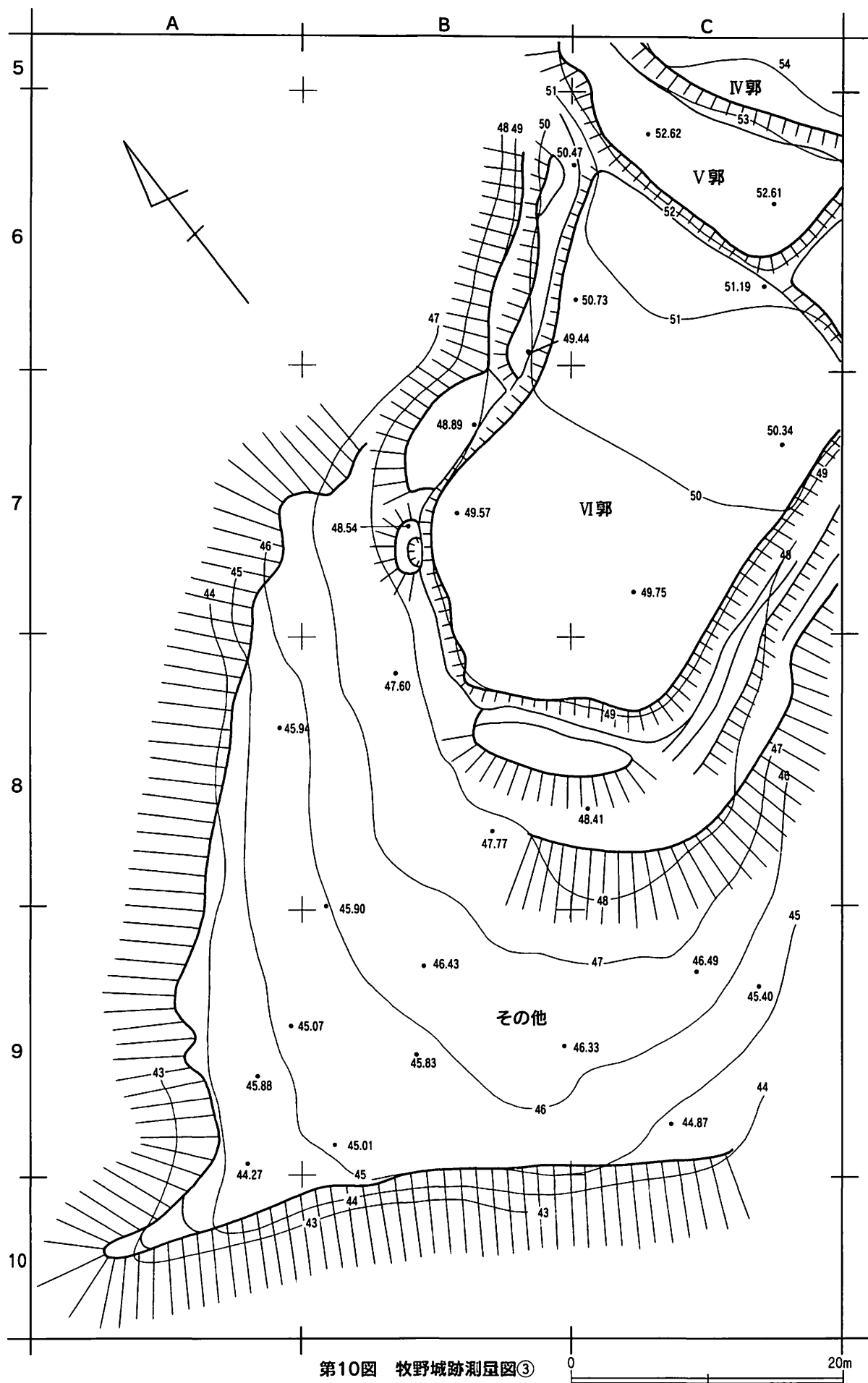
Ⅴ郭から下部の斜面部、自然地形のままである。標高48～43mの範囲まで、1mピッチでコンタを入れたが、最下部は、極端に括れて、土塁状を呈する。これから下部は、九州自動車道の法面となる。

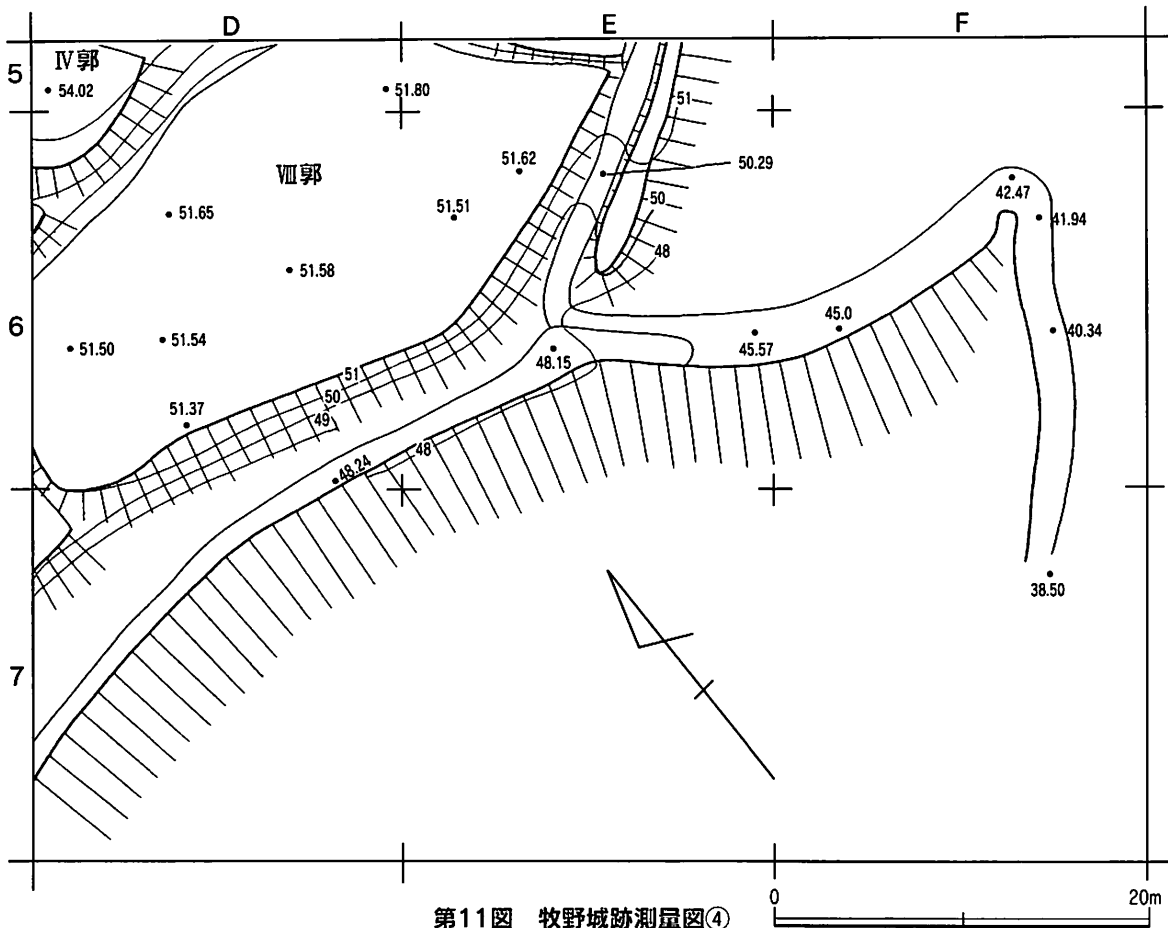


第8図 牧野城跡測量図①



第9図 牧野城跡測量図②





第11図 牧野城跡測量図④

〔大田幸博・益永〕

文献にみる牧野城跡

『古城考卷之中』

牧野古城

江田村にあり、内空閑鎮房家士、誤りて佐々宗能を討取る、天正十六年、當城に退去し、二月下旬出城して三月朔日到筑後柳川城、安國寺惠瓊に會して、肥後一國の儻に有らざるを訴んとす、惠瓊誅之、此時當城留守居は、荒木彌助鎮則也、鎮房、三月三日、於柳川城戦ひ、終に切腹す、荒木鎮則、伊形市郎右衛門等、於康平寺、鎮房の作善を修す、鎮照も當城にあり、兄鎮房は、安國寺柳川方便り寄て討しは、隈部が子故也、隈部系圖には甥とあり、我は服部が子なれば子細なしと、當館に移りしを、安國寺聞付、江田村住人鎮照が家人古武城某に、方便状を送りて云、

今度鎮房惡逆に付、於筑州被誅畢、鎮照猶逆意を振ひ、餘黨を導卒し、牧野城に楯籠、運智略條、其聞明白也、急運計略、鎮照を討、首を捧候者、明所二百丁安堵之御判可賜者也、仍下知如件、

天正十六年九月日

安國寺判

古武城殿

豊後野縫殿介

舞尾藏人

米渡尾高野岩尾久米野等に當る

於是同九月廿六日、牧野城を攻落す、内空閑攝津守鎮照、大に奮戦して遂に自殺す、二十有三歳と云、山本郡霜野城條下に可考合、鎮照辭世、

はたち餘り三とせの秋を一期とは

今ぞ誠に思ひしらるゝ

〔現代語訳〕

江田村にあり。内空閑鎮房の家士が誤って佐々宗能を討ち取ってしまった。(鎮房は)天正16年に当城(牧野城)に退去していたが、2月下旬に城を出て、3月1日に筑後柳川城に到着した。そこで安国寺恵瓊に面会して、(自分は)肥後で一揆を起こした国衆の党ではないと訴えようとした。しかし恵瓊は鎮房は誅伐した。この時、牧野城の留守居は荒木弥助鎮則であった。鎮房は3月3日に柳川城で戦い、終りに切腹した。荒木鎮則と伊形市郎右衛門らは康平寺で鎮房の供養を修めた。鎮照も牧野城に居た。兄鎮房を、安国寺が柳川に呼び寄せて討ったのは、鎮房が隈部氏の子だったからである。隈部系図には婿とある。自分は服部氏の子孫なので処分は無いだろうと、牧野の館に移ったのだが、安国寺はこれを聞き付け、江田村の住人で鎮照の家来であった古武城某に方便状(策略をしたための書状)を送って言うには、

「今度鎮房は悪逆をはたらいたので、筑後でせめ殺されたのである。それなのに鎮照はなおも謀反の意志を振るい、残党を率いて牧野城に立て籠もり、知略を巡らしているという、その噂は明白である。急いで計略を巡らして鎮照を討ち、その首を捧げるならば、所領200町の安堵の御判を与えよう。よって、このように命令するものである。

天正16年9月日

安国寺 判

古武城殿

豊後野縫殿介

舞尾蔵人

米渡尾・高尾・岩尾・久米野 などに宛てる」

ここにおいて同年9月26日、(古武城らは)牧野城を攻め落とした。内空閑攝津守鎮照は大いに奮戦したが、終に自殺した。23歳であったという。これについては山本郡霜野城の条と考え合わせるとよいだろう。鎮照辭世(の句)、

はたち余り三とせの秋を一期とは

今ぞ誠に思ひしらるゝ

(23歳の秋、これが私の人生に巡り来るたった一度きりの秋であることを、今この時になって心底思いすることよ)

『肥後国誌』 卷之八 玉名郡 内田手永

江田莊 江田村

牧野城跡 天正十六年内空閑鎮房 事ハ山本郡霜野ノ條下ニ出 カ家士誤ツテ佐々與左衛門宗能ヲ討取秀吉公ノ不審ヲ蒙リ當城ニ退去シ二月下旬城ヲ出テ筑後柳川ニ到ル三月朔日安國寺恵瓊ニ會シテ肥後一揆ノ黨ニアラサル事ヲ歎訴セントス恵瓊謀之此時牧野城ノ留守居ニハ荒木彌助鎮則ヲ居ラシム鎮房ハ三月三日歿サレテ柳川城ニ於テ

戦ヒ終ニ切腹ス荒木鎮則伊形市郎右衛門等霜野康平寺ニ於テ鎮房ノ爲ニ佛事作善ヲ修ス某弟備前守鎮照ハ兄鎮房ニハ隈部親永カ子ナル故惠瓊方便リニテ柳川ニテ誅シタレトモ我ハ服部ノ正脉ナリ子細アラシト當城ニ移リシヲ惠瓊之ヲ聞キ江田村ノ居住ニテ鎮照カ家士古武城某ニ方便状ヲ送テ日

今度鎮房惡逆に付於筑州被誅畢鎮照尚逆意を振ひ餘黨を導率し牧野城に楯籠運智畧候條其間明白也運計畧鎮照を討首を當地へ捧候は、明所二百町安堵之御判可給者也仍下知如件

天正十六年九月日

安國寺在判

古武城との 豊後野縫殿助との

舞野藏人との

米渡尾 高野 岩尾 久米原

於是古武城等惠瓊ニ應シ遂ニ同年九月廿六日ノ夜牧野城ヲ攻落ス鎮照辭世ニ

はたち餘り三とせの秋を一期とは

今をまことに思ひしらるゝ

ト詠シテ大ニ奮戦ノ後自殺ス行年二十三歳也シト云 隈部家傳山本部霜野城跡ノ條下ニ委ク出入故ニ贅セス 是ヨリ當城廢ス

(補)古記集覽霜野來由記云内古閑鎮照ハ尾平ノ城ヲ退キ小代伊勢守ヲ頼ミ玉名郡石尾村ニ暫ク世ノ景況ヲ窺ヒ居住アリ然レトモ何ノ沙汰ニモ及ハレス扱ハ我身ニ於テ科ナシ何ヲカ憚ルヘシトテ兄鎮房 政利トアリ ノ居城ナリシ江田村牧野ノ館ニ移住セリ此事筑州ニ聞ヘケレハ差置ヘキニアラストテ安國寺立花氏ト謀リ玉名郡ノ小武士等 霜野物語ニハ譜代ノ家人コぶし善左衛門トアリ本書古武城ノ誤ナルヘシ ニ狀ヲ認メテ賺シケレハ三百餘騎夜中ニ牧野城ニ押寄ル城中思ヒモ寄ラス騒動ス寄手トモ案内ハ知リツ堀門ヲ打破リテ亂入セリ郎從共ハ皆々宿所ニ居リ有合フ當番ノ士廿五人鎮照ノ左右ニ從ヒ討テ出散タニ戰ヒ双方討死多ク鎮照モ主從三人ニ成ヌイサ自害セントテ廣椽ニ駈上リ辭世ヲ書畢リ腹十文字ニカキ切給ヘハ郎從ハ屋殿ニ火ヲ掛ケテ相果ル鎮照二十三歳ト聞エシ鎮照ノ一子藤助ト云シ幼若有シカ行方ヲ知ラス一女子アリ乳母是ヲ育シテ山中ニ隠レ軍散シテ後筑州ニ落行キ十六歳ノ時又當國ニ歸ラレシヨリ昔ノ被官ノ者等ト相談シテ玉名郡白金村ニテ故アル者ノ妻ト成リ八十餘歳ニテ終シト云リ

(補)同書内古閑記云 前略 鎮照ハ男子ナク姫君一人アリ小鳥ヲ愛シ御座ケル處ニ敵亂入スルヲ御覽シテ乳母ニ取付テ如何セント仰ケルヲ乳母何トソシテ落シ奉ントテ此方ヘ御出候ヘト御手ヲ引テ南ノ岩ノハラヲ忍下リ五町計數ヲ下リ岸陰ヲツタヒテ達山ト云所ニ祖母ト外舅ト居リケル故此菴ニ忍ヒ入頼ミケレハ奥深く隱シ置キ 用木村ノ内達山ニ北丘尼林ト云所アリ此所ニ住ケルカ 三日御滯留アリテ事靜リシ後乳母ハ比丘尼トナリ姫君ハ其子ノ如ク出立給ヒ油單ヲ懸ケ笠ヲ着テ草鞋脚絆ニテ筑後ヲ指テ落給フ此時御歳八歳ナリ十六歳ニテ國ナツカシク思シ肥後ニ來リ給テ玉名郡小野村 野原莊ニ小野村アリ來由記ニ云白金村見ヘス ニ縁付給ヒ御歳八十餘ニテ寛文九年ニ終リマシヘケル

〔現代語訳〕

江田莊 江田村

牧野城跡 天正16年に内空閑鎮房 この事は山本部霜野の条に出ている の家士が誤って佐々木左衛門宗能を討ち取り、(鎮房は)秀吉公の不審をかって、当城(牧野城)に退去したが、2月下旬に城を出て筑後柳川に到着した。3月1日に安国寺惠瓊に面会して、(自分は)肥後一揆の党ではないことを嘆き訴えようとしたが、惠瓊は鎮房を(討とうと)謀った。

この時牧野城の留守居には荒木弥助鎮則を据えてあった。鎮房は3月3日に騙されて柳川城において戦い、終に切腹した。荒木鎮則、伊形市郎右衛門らは霜野康平寺において鎮房のために供養の仏事を修めた。鎮房の弟備前守鎮照は、兄鎮房は隈部親永の子であるから、惠瓊の策略によって柳川で討たれたが、自分は服部氏の正統なので処分は無いだろうと、牧野城に移ったが、惠瓊はこれを聞いて、江田村居住で鎮照の家士の

古武城某に方便状(策略をしたための書状)を送って言うには、

「今度鎮房は悪逆をはたらいたので、筑後でせめ殺されたのである。それなのに鎮照はなおも謀反の意志を振るい、残党を率いて牧野城に立て籠もり、策略を巡らしているという、その噂は明白である。急いで計略を巡らして鎮照を討ち、その首を捧げるならば、所領200町の安堵の御判を与えよう。よってこのように命令するものである。

天正16年9月日

安国寺 判

古武城殿

豊後野縫殿介どの

舞野蔵人との

米渡尾・高尾・岩尾・久米原」

ここにおいて古武城らは恵瓊の誘いに応じ、ついに同年9月26日の夜、牧野城を攻め落とした。鎮照は辞世に

はたち余り三とせの秋を一期とは

今をまことに思ひしらるゝ

(23歳の秋、これが私の人生に巡り来るたった1度きりの秋であることを、今この時になって心底思い知ることよ)

と詠んで、大いに奮戦した後自殺した。享年23歳であったという 服部家伝、山本郡霜野城跡の条に詳しくでているので略す。 これより牧野城は廃れたのである。

(補)古記集覽霜野来由記に言うには、内空閑鎮照は尾平の城を退去して、小代伊勢守を頼り玉名郡石尾村に暫く世の中の景況を窺いながら居住していた。しかし何の処分にも及ばず、さては我が身には罪は無いのだ、何を憚ることがあろうかと、兄鎮房 政利とあり の居城である江田村牧野の館に移住した。この事が筑後へ聞こえたので、このまま放っておくべきではないと、安国寺は立花氏と謀り、玉名郡の小武士等 霜野物語には譜代の家人こぶしろ喜左衛門とあり。本書古武城の誤りである に書状をしたために誑かしたので、(小武士等)300余騎は夜中に牧野城に押し寄せた。城の中は思いもよらぬことに大騒動となった。寄せ手どもは勝手知ったるもので塀門を打ち破って乱入した。郎従どもは皆宿所に居り、有合わせの当番の武士25人が鎮照の左右に従い打って出、散々に戦い、双方とも討死が多数出、鎮照も主従3人になってしまった。(鎮照は)いざ自害をしようと広縁に駆け上がり、辞世を書き終わり腹を十文字に掻き切ったので、郎従は屋敷に火をかけて共に相果てた。鎮照は23歳であったという。鎮照の一子に藤助という幼い若君がいたが行方は分からない。一人の姫もいた。乳母は姫を育てて山中に隠れ、軍が去った後に筑後に落ち延び、16歳の時に再び、肥後に帰国したので、昔の被官の者達と相談して、玉名郡白金村で内空閑氏と関わりのある者の妻となって、80歳あまりで亡くなったという。

(補)同書内古閑記に言う 前略。鎮照には男子は無く、姫君が1人いた。小鳥を愛でておいでになるところに敵が乱入するのをご覧になり、乳母に取り縋って「どうしましょう」とおっしゃるので、乳母は何としても逃がしてさしあげようと、「こちらへおいでください」と(姫君の)御手を引いて、南の岩の中程を忍び下り、5町ほど藪を下り岸陰をつたって、達山という所に自分の祖母と外舅が住んでいるので、この庵に忍び入って頼んだところ、(祖母と外舅は2人を)奥深くに隠し置いて 用木村の内達山に比丘尼林という所がある。ここに住んでいたのだろうか (乳母と姫君は)3日滞留し、騒乱が静まった後に乳母は比丘尼となって、姫君はその子のようにして出立なさり、油単(1枚の布または紙に油を沁み込ませたもの)を懸け、笠を着て、草蛙に脚絆で筑後を目指して落ち延びなされた。この時(姫君は)御8歳であった。16歳になって国を懐かしく思い、肥後においでになって玉名郡小野村 野原荘に小野村あり。来由記にいう白金村は見えず に縁付かれ、80歳あまりで寛文9年にお亡くなりになった。

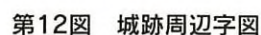
〔高森莊子〕

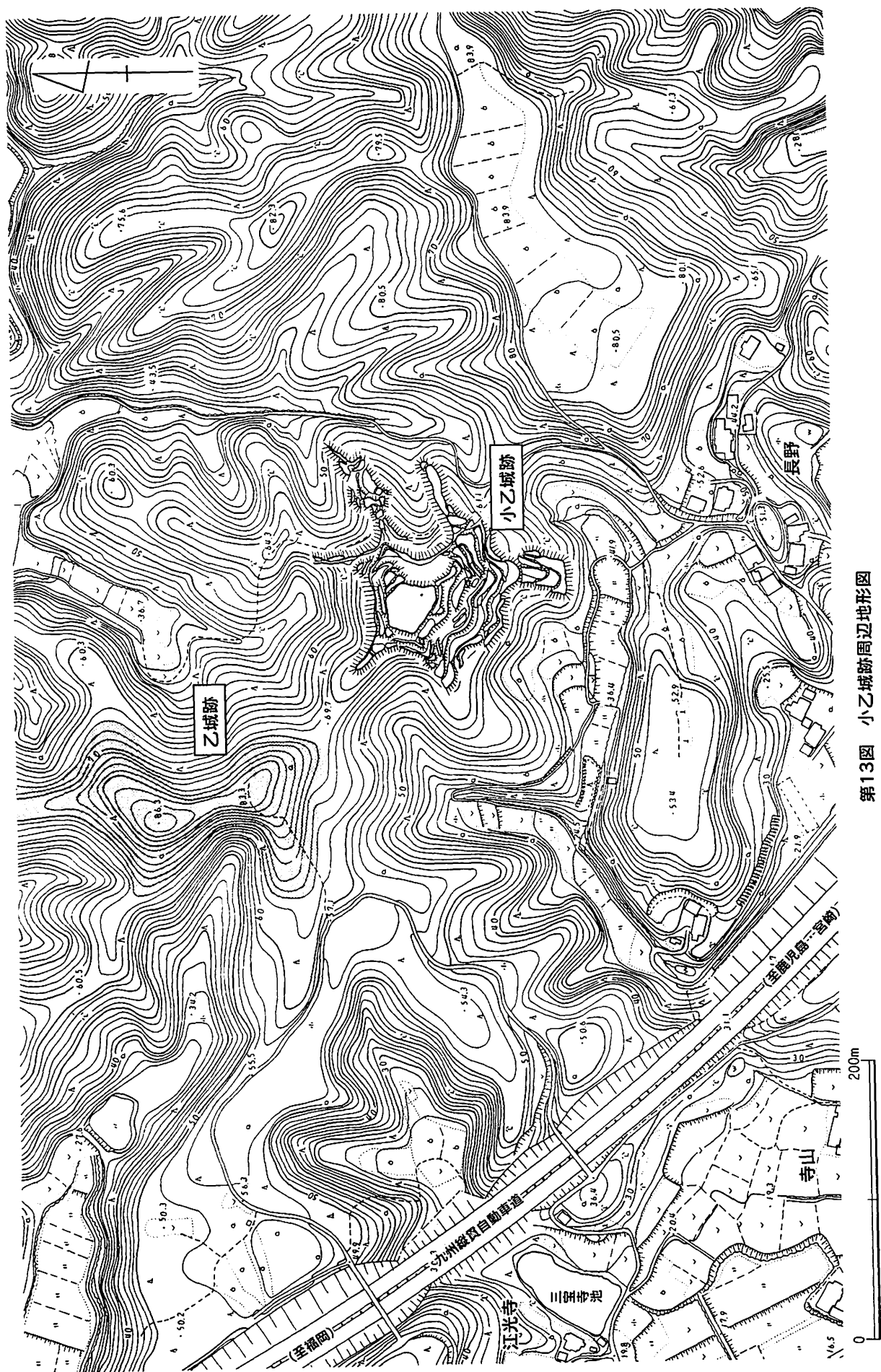
①江田の十字路から、大牟田・植木線(主要地方道)を、車で約2～3分、東進すると、牧野城跡に至る手前に、寺山のバス停がある。現在の様に県道が改良される前は、ここから右に折れる脇道があり、江田川を跨いでいた。川に橋は架かってなく、飛び石が並んでいただけの状態であったという。この脇道は、小乙城跡からのものである。

②城跡へは、寺山のバス停から左折して、脇道を進む必要がある。小迫地の右岸に造られた道で、ほど無くして九州縦貫自動車道のガード下を潜る。ここを過ぎると、急な坂道となり、途中から寺山地区の長野集落となる。ここには5軒の家屋があるが、城跡は、この道が、集落を抜けた所にある。三叉路となっているので、ここを左折して、少し下ると、目の前が城跡である。典型的な平山城で、登城口は墓地となっている。

③城跡は、所々が桧の植林地であるが、大方、雑木山で、うっそうとした感じがする。地元の認識は、乙城の関連から「小乙城というからには、この山も城跡だろう」という程度である。一方で、乙城跡は、山頂に宮地嶽神社(通称：みやじだけさん)があり、城名を記した標木も立っている。そのために、城跡としての認識は強い。常識的には、乙城が本城で、小乙城が出城であろう。

〔石工みゆき〕





〔概 要〕

単郭の平山城である。山頂に主郭があり、丘陵斜面に小段を刻んでいる。さらに、裾部に6本の小張り出しがあるので、ヒトデの様な格好をしている。小張り出しについては、北西側から、時計回りにA～Fとした。丘陵斜面の削平地には、1～36の番号を付けた。

〔主 郭〕

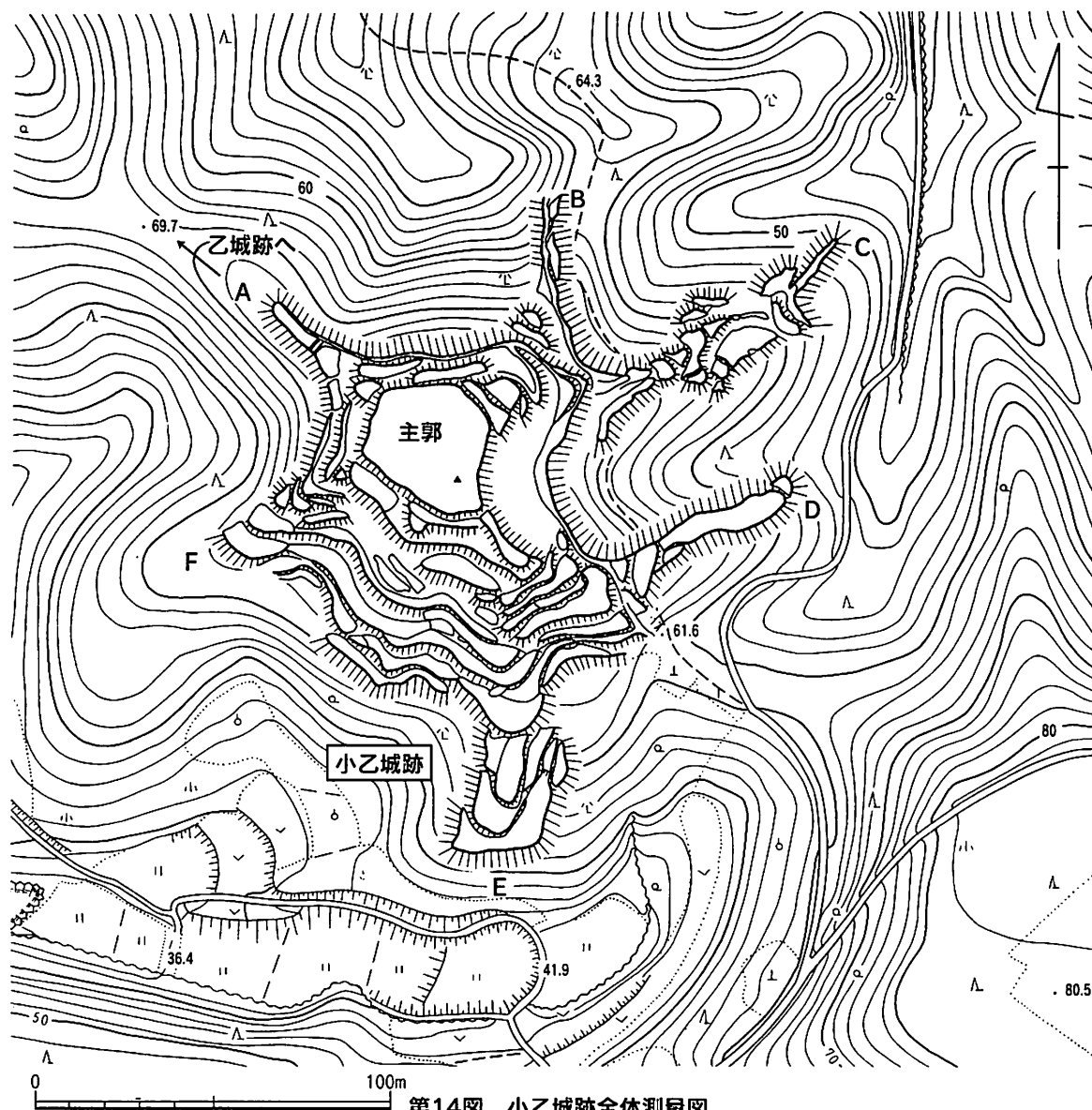
平坦地であるが、中央部に最高所があり、標高82.30m。東側寄りに、縦長で卵形の82mコンタが巡る。歪な台形で、北縁32m、南縁38m、東縁36m、西縁20m。

〔主郭の西下〕

西側斜面に細長の小段1がある。犬走りの様なもので、長さ23m、幅2.5～1.5m、標高は北側で76.48m。主郭北西縁との比高差は、約4.95m。

〔小張り出しA〕

主郭の北西下にある。帯状の平坦地で、長さ15m、幅4.0m、中央部寄りの標高は、72.11m。付け根部分に、仕切り溝のような浅い堀切がある。上場の幅は、2.5m。この張り出し方向に乙城がある。地形的には、尾根続きであるが、間に深谷が入っている。荒地地でもあり、たやすく歩いていける状況にない。



〔主郭の北下〕

斜面に6個所の小段がある。この内、小段2・3は、細長の帯状のもの。小段2は、長さ21m、幅3.0m、西寄りの標高は、80.21m。主郭との比高差は、1.17m。小段3は、長さ18.5m、幅4.0～2.0m、西端の標高は、77.19m。主郭との比高差は、4.24m。

小段4・5は、主郭の北東側斜面を造成したものである。上段の4は、帯状をなし、長さ18.5m。幅5.5～2.5mで、北西側へ漸次、すばまる。標高は、南東端で81.2m。下段の5は、台形状をなし、上位の長さ11.5m、下位の長さ7.5m、幅7.0m。標高は、北西隅で80.68m。

〔小張り出しB〕

城跡の入口(墓地)から、城跡の東下を通して北側へ抜ける小道がある。Bを利用したものである。地形は、痩せ馬の背のようで、途中で一旦、窪み、それから再び、漸次、高くなっていく。一種の間道であろう。窪んだ個所の標高は、59.41m、高くなった北端部分で、60.92m。普通、このような個所には、堀切を見るが、ここに、それらしき痕跡は無い。Bの南側上位には、二段の小段がある。上段の6は、帯状をなし、長さ12.5m、幅2.5～2.0m、中央部がやや窪んでいる。標高は、西側寄りで、69.09m。小段5との比高差は、11.59m。下段の7は、歪な舌状形をなす。長さ6.5m、幅4.0m。標高66.73m。小段6との比高差は、2.36m。

〔小張り出しC〕

地形は、痩せ馬の背のようで、北東側へ41m延びていく。Cの付け根と、北東端の比高差は、19.89m。上面は階段状になって、高さを減じていく。明らかに、城の遺構である。途中で、北側斜面部に、小段8・9を見る。小段8は、三角形をなし、上位の長さ8.5m、標高53.89m。Cとの比高差2.0m。小段9は、帯状をなし、長さ10.5m、標高51.83m、小段8との比高差は、2.06m。

〔主郭の東下〕

斜面は、比高差15mの急傾斜地であるために、小段の遺構はない。敵方の登攀は、無理である。裾部は、小張り出しB・Cに挟まれた迫地となっている。

〔主郭の南東側〕

痩せ馬の背の様な地形で、長さ20m、幅4.5～3.0m。緩傾斜地で、先端は標高78.95m、主郭との比高差は3.16m。下部に5個の小段が連なる。小段10は、上位の長さ20m、幅3.5～1.0m。中央部は標高75.25m。上位との比高差は2.53m。小段11は、長さ24.5m、幅6.5～2.0m、北東側が幅広く、南西側へ漸次、すばまる。中央部は標高72.79m。小段10との比高差は2.46m。小段12は、長さ27m、幅2.5～2.0m。北東側での標高71.22m。小段11との比高差は1.57m。小段13は、北東端が北側へ回り込んで、小段12を包み込んでいる。下位の長さ29m、北縁での長さ13.5m、幅9.0m～3.0m、形状は、小段11と同じ。中央部の標高68.71m、小段12との比高差は2.51m。小段14は、長さ25m、幅4.5～1.5m、形状は、小段11・12と同じ。中央部で標高67.00m、小段13との比高差は1.71m。

〔小張り出しD〕

基本的には「痩せ馬の背」地形である。ただし、やや幅広で、上面には、平場が確保されている。東北東側へ56m延びている。緩傾斜地で、両端では、3.18mの比高差がある。

Dの付け根に、小段15・16が付いている。小段15は、三角形をなし、上位の長さ6.5m、幅4.5m、標高66.56m。小段13との比高差1.73m。小段16は、台形状をなし、上位の長さ6.0m、下位の長さ15.5m、幅6.0m。標高63.03m、小段15との比高差3.53m。これに対して、Dの先端部には、小段17を見る。台形状をなし、上位の長さ6.0m、下位の長さ5.0m、幅3.5m。標高56.92m、Dの先端部との比高差は1.7m。

〔主郭の南下〕

標高78mに、削り落としのラインが認められる。主郭と、このライン間には、横並びに、小段18と19があ

る。これより下位については、標高74mまでに小段20、標高69mまでに小段21と22を見る。ここまでの小段のあり方は疎の状態にある。

地形が大きく変化するのは、標高68mから下位の部分である。犬走りのような細長い小段23と24があり、その間に小段25が挟まる。測定の対象としたのは、標高59mラインまでで、その間に、小段26～28が連なる。

小段18は、長方形をなし、長さ16.5m、幅5.5～4.5m。標高78.96mで、主郭との比高差2.77m。小段19は、犬走りの様な地形で、長さ21m、幅1.5～3.0m、西端で舌状形をなす。上位の長さ5.5m。幅7.0m。小段20は、隅丸の鈍角三角形をなす。下位の長さ23.5m、幅6.5m、標高76.24m。小段21は、長さ13m、幅1.5～3.0m、標高70.95m。小段22は、三日月形状をなし、長さ14m、最大幅3.0m、標高69.50m。

小段23は、幅1.5～3.0m、蛇行しており、実測図上での直線距離は、65.5m。中央部は、標高68.52m。同地形の小段24は、幅2.5～5.0m、中央部で0.5mの段差がある。高い方の北西側で、標高64.94m、全体の直線距離は77m。小段25は、やや蛇行しており、長さ19m、幅6.0～3.0m、南東側から北東側へ漸次すばまる。標高67.61m。

小段26～28は、いずれも弯曲する。小段26は、直線距離で長さ33.5m、最大幅5.0m、中央部で、標高61.63m。小段27は、直線距離で長さ38.5m、幅3.5～3.0m、中央部で、標高59.58m、主郭との比高差は22.15m。小段28は、北西側が、竹の密集地であるため、実測を断念した。南東側で、幅4.5m、標高62.97m。

〔小張り出しE〕

平場面積の少ない小乙城跡では、E-1～4が、一定面積を有して、目立っている。付け根にあたる上位に小段29、斜面部に、小段30・31がある。

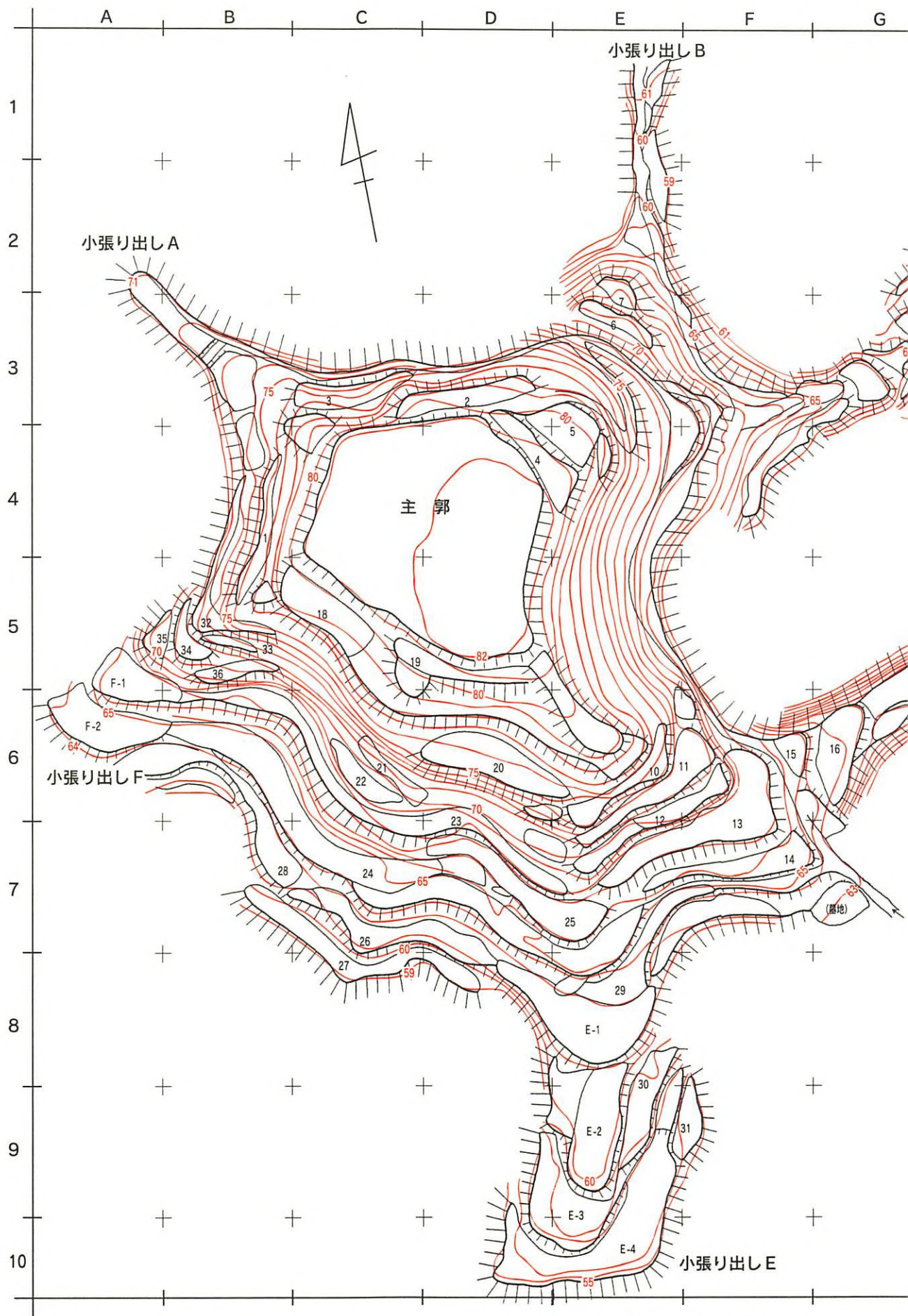
小段29は、蛇行しており、長さは直線距離で26.5m。標高63.91m、最大幅5.5mで、南西側から北東側へ漸次、すばまる。E-1は、舌状形をなし、標高62.35m、西側がすばまっている。最大幅11.5m、上位の長さは、直線距離で24.5m。比高差は、上位の小段29から1.56m、下位のE-2とは、1.95m。E-2は、基本的に、やや細長の舌状形である。長さ18m、幅は上位で11.5m、南西隅がやや窪んでいる。標高60.40m、E-3との比高差は1.76m。E-3は、舌状形をなすが、上位が窪んでいる。上位の直線距離は、14.5m、最大幅は13m。先端部は標高57.91m。

小段30は、標高58.39m、E-2の東下にある。上位との比高差は2.0m。帯状をなし、幅20m。E-4は、E-2・3と小段30の直下にあつて、これを取り囲む状態にある。逆L字形をなし、幅9.0～3.5m、最大幅は、弯曲部分にある。北側は、すばまり、西端は、ラップ状に開いて、長さ12m。E-4北端の標高は、56.97m、上位との比高差は1.42m。小段31は、E-4の東下にある。長さ13.5m、最大幅4.5m、帯状をなして、北側は、すばまる。標高55.84m、上位との比高差は1.13m。

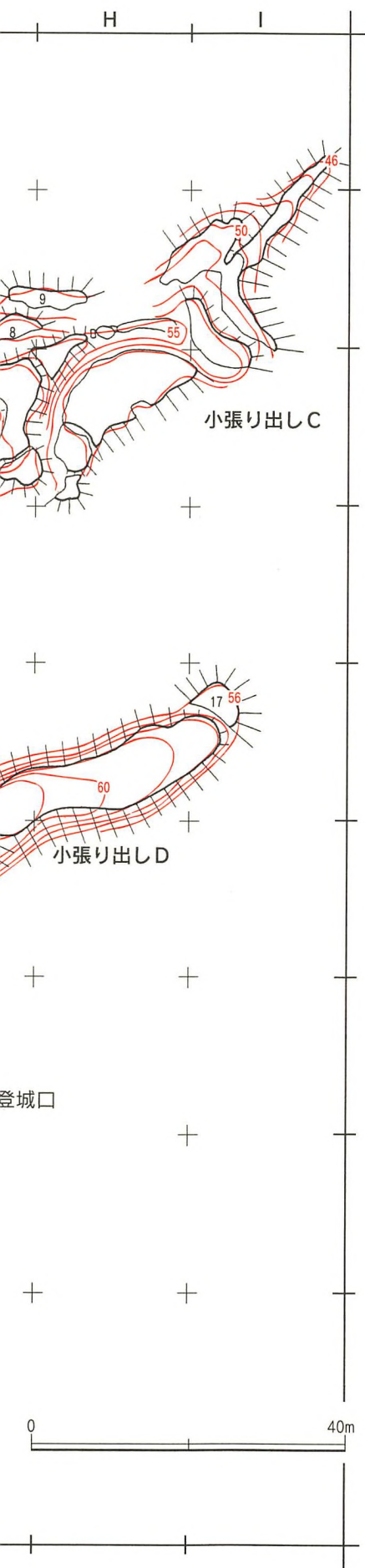
〔小張り出しF〕

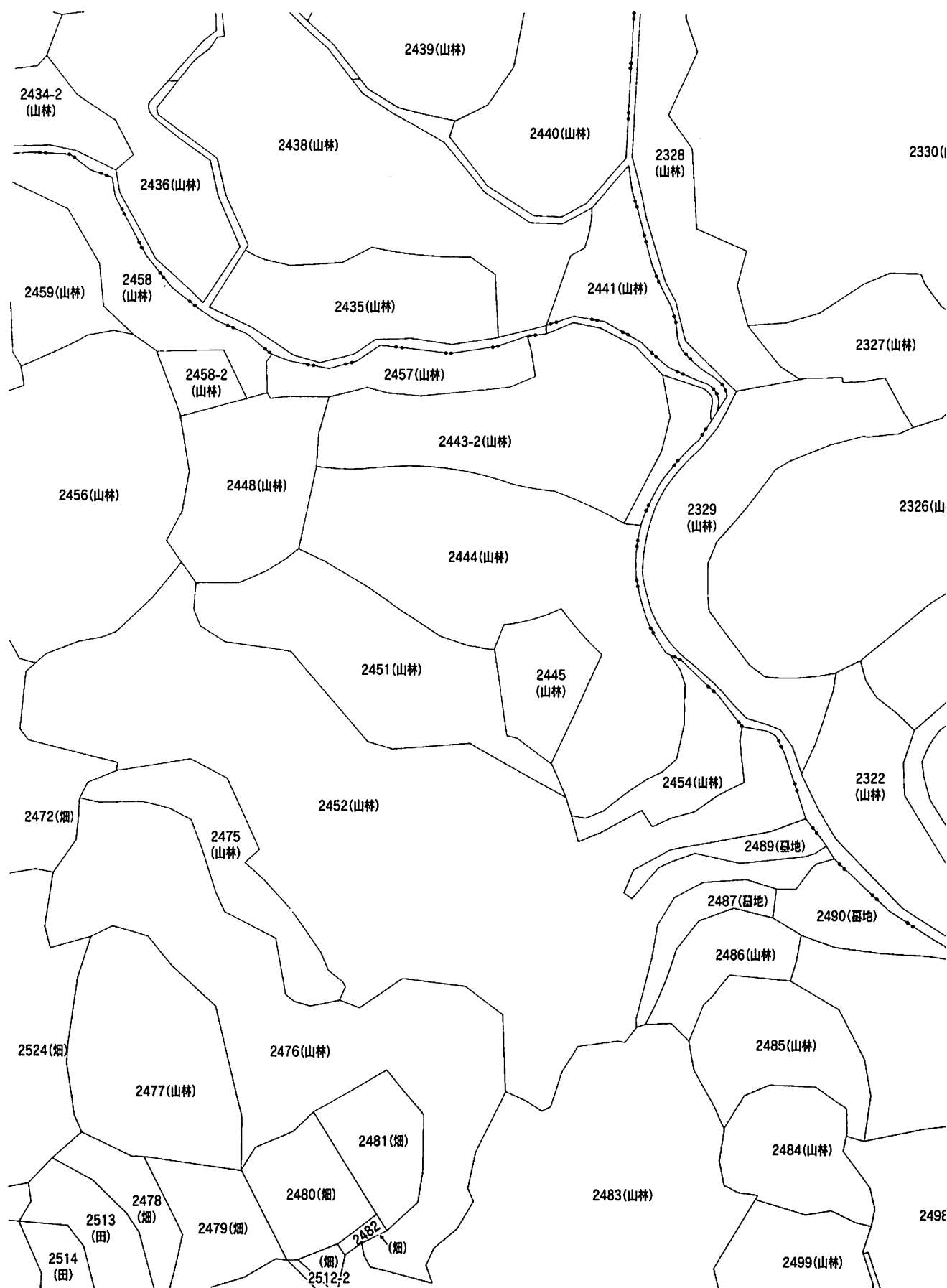
標高76～68mの間に、小段32～36と、F-1・2の平場がある。小段32は、Fの付け根にあたり、L字形をなす。最大幅は4.0mで、弯曲部分にある。東側の長さ12.5m、西側は、細長い小道となって北側へ延びる。この部分の全長は24.5m。弯曲部分は標高73.5m。小段33は小段32の真下にある。帯状をなし、長さ9.0m、幅1.5m。標高72.5m、上位との比高差は、1.0m。小段34は、小段32・33の南西下にある。上位が弯曲し、三日月形をなす。東側に最大幅があり、北側で漸次、すばまる。上位の直線距離は、9.0m。最大幅は、3.0mで、弯曲部分にある。標高70.52m、小段35は、小段34の西下にある。隅丸の三角形をなし、上位の長さ7.5m、最大幅3.5m。標高70.32m、小段36は、帯状をなし、長さ13m、幅は、2.5～1.5m。標高70.10m。小段34～36は、一連の地形と考えてよい。

F-1は、隅丸の三角形で、上位の長さ12.5m、最大幅7.5m。標高66.80m、小段33との比高差は3.52m。F-2は、西端が直線で、最大幅6.0m、東側がすばまる。標高64.91m。上位との比高差は1.83m。

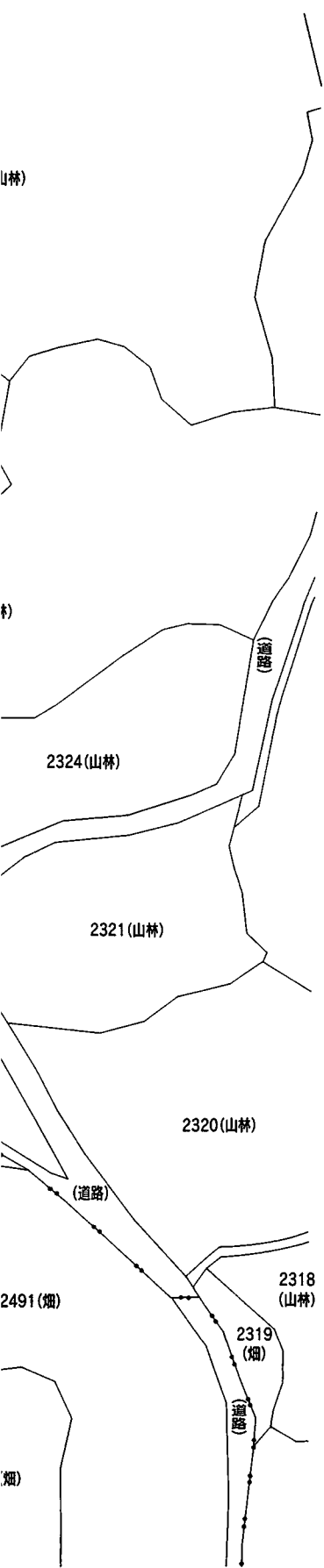


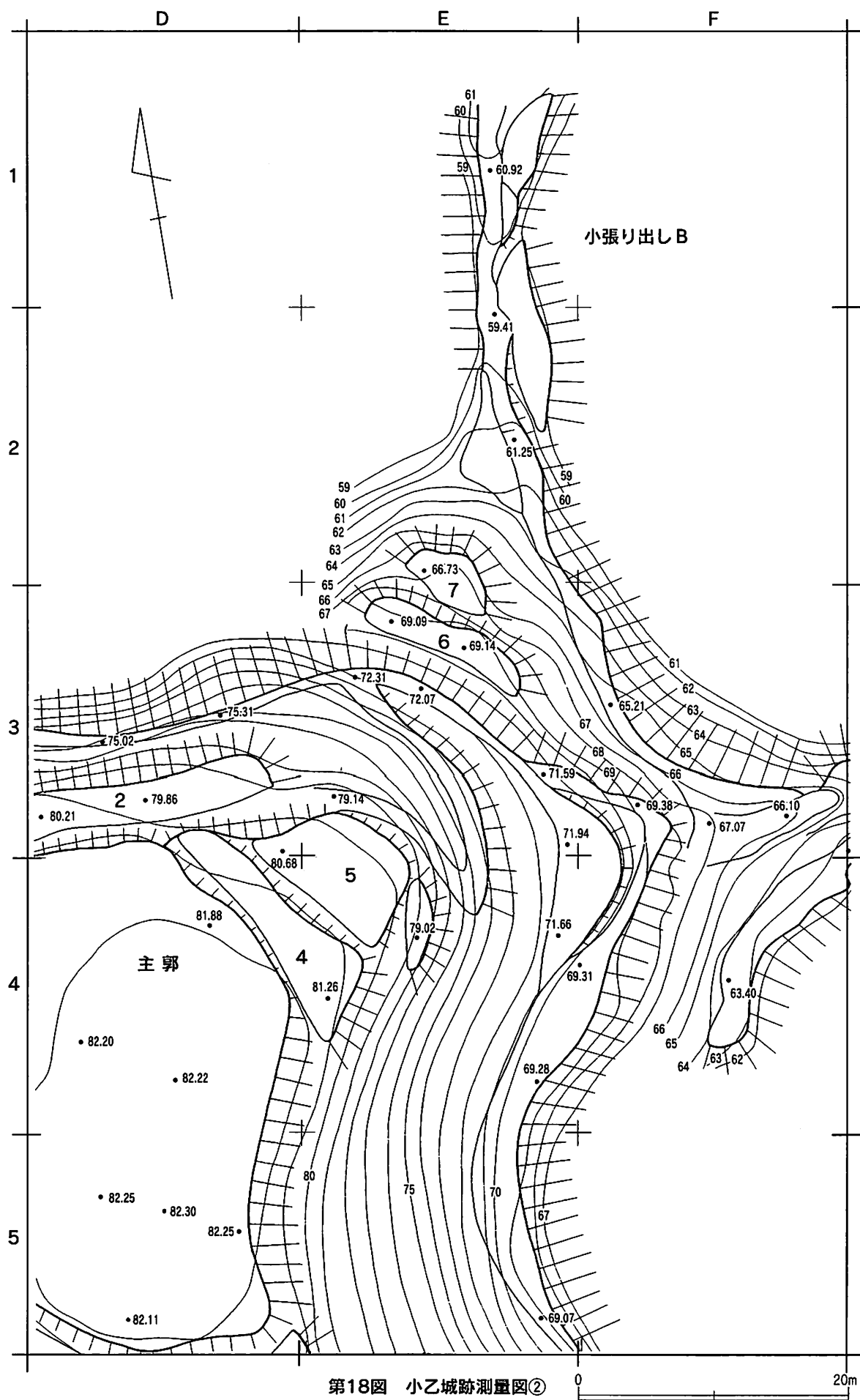
第15図 小乙城跡グリッド設定図



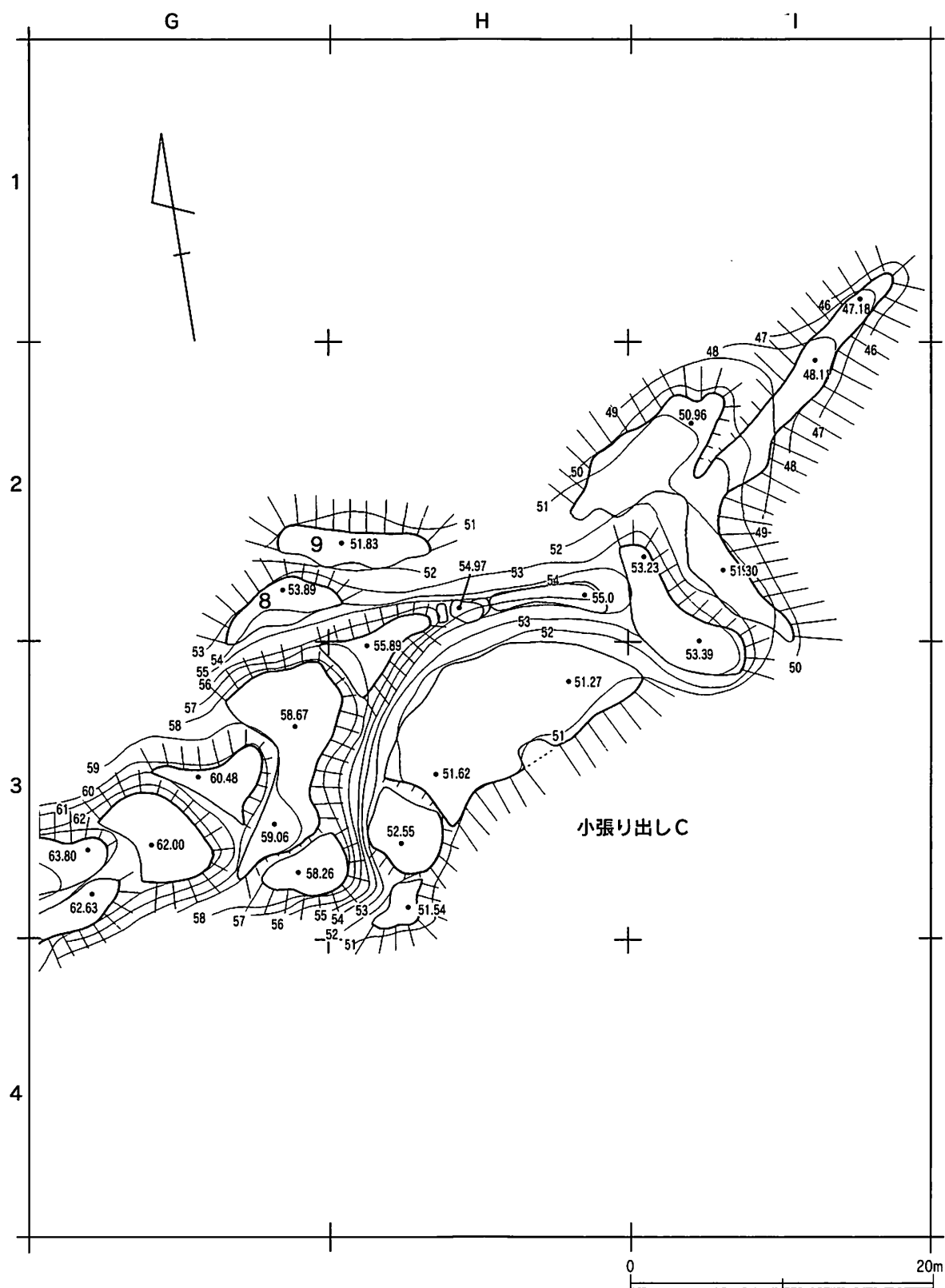


第16図 小乙城跡地籍図

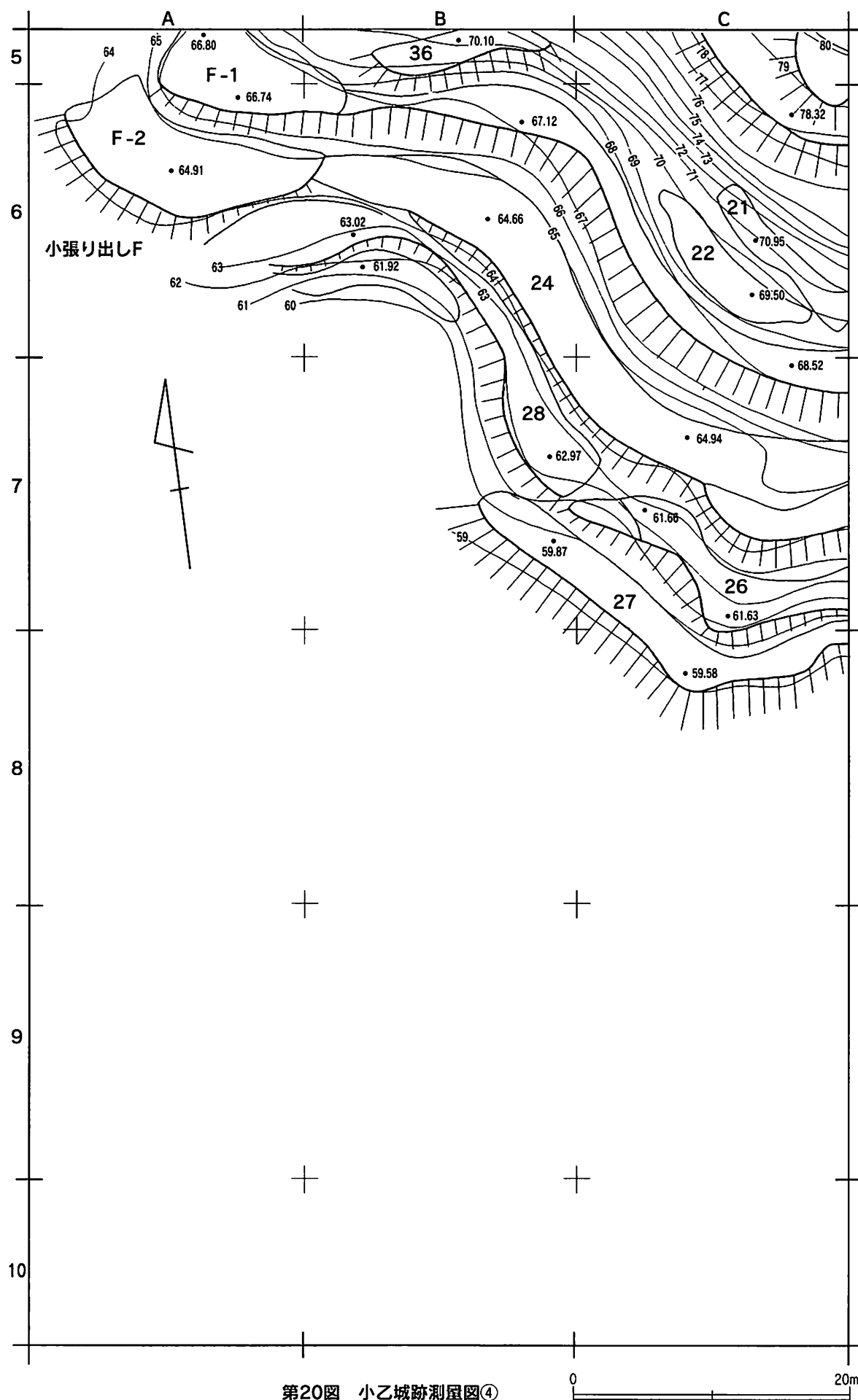




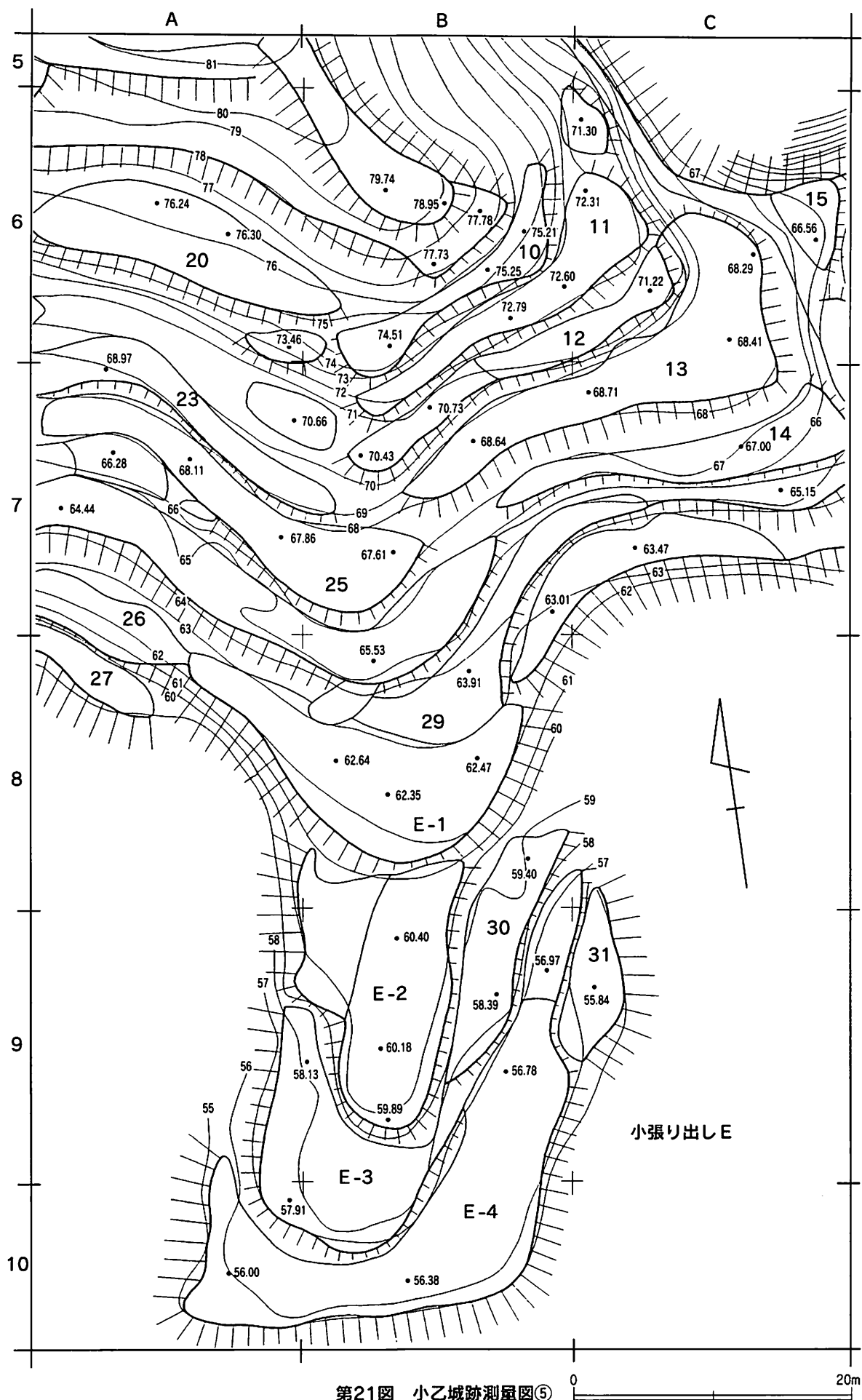
第18図 小乙城跡測量図②



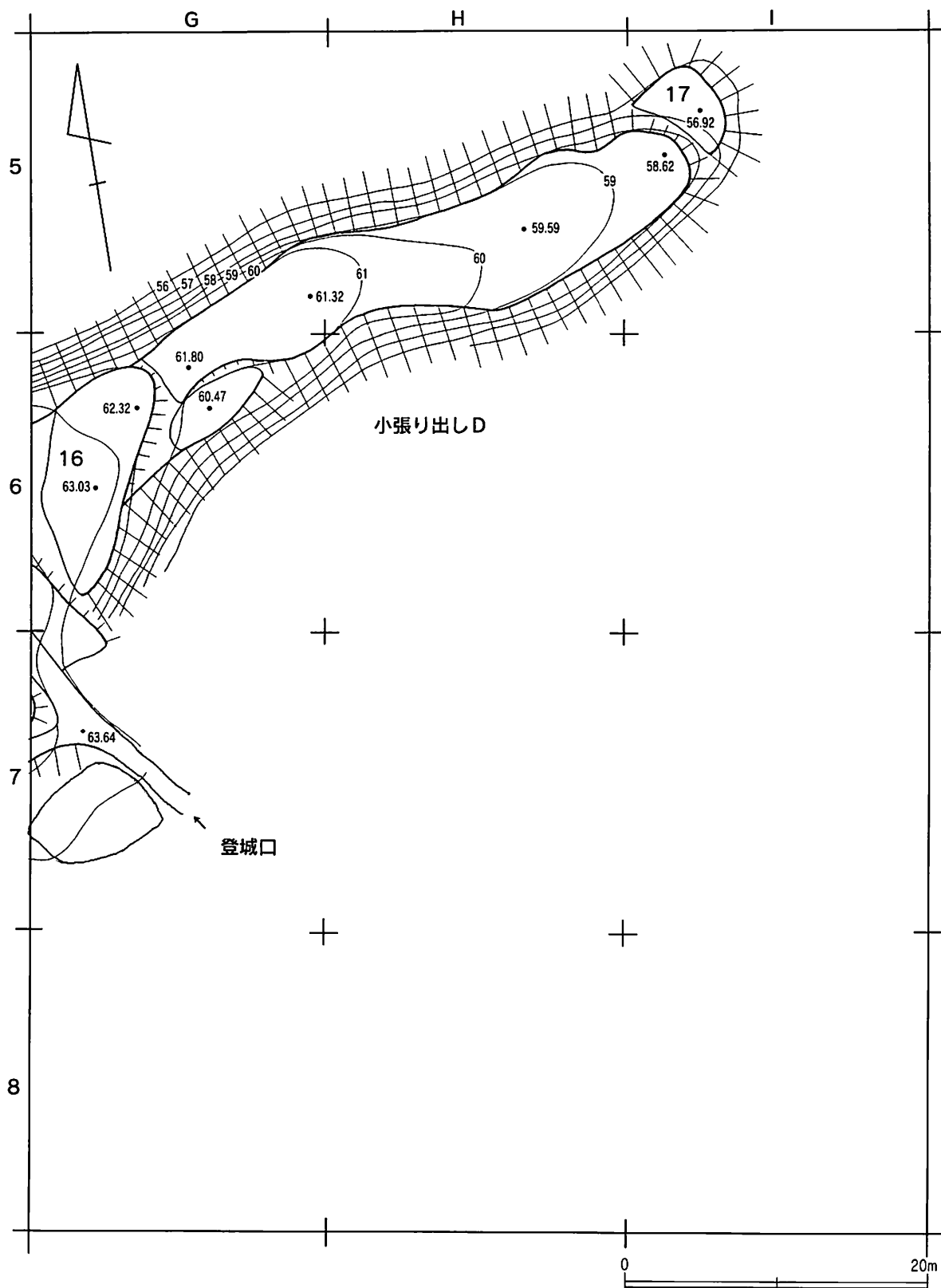
第19図 小乙城跡測量図③



第20図 小乙城跡測量図④



第21図 小乙城跡測量図⑤



第22図 小乙城跡測量図⑥

第Ⅲ章 ま と め

調査の対象となった牧野城跡と小乙城跡は、典型的な平山城で、大牟田・植木線(主要地方道)から、少し北側へ入り込んだ小丘陵地帯の中にある。この二城跡は、それぞれに大きな特色がある。

1. 牧野城跡

①地形図と測量図に見るように、(伝)城跡地と民家の敷地が、見事なまでに一体化しており、典型的な「総構えの城」の様相を呈する。さらに地形的な制約により、現在の小集落が、これ以上、拡大し得ない状態にあるために、おのずと、城時代の生活区域が推定されることになる。城主と、その一族の住まいであるミクロ的な城域を知る上で、貴重な資料である。同時に、意外と狭い区域であることにも、驚かされた。もちろん、この場合、外縁部にあたるマクロ的な防衛ラインの存在が不可欠で、広域的に周辺の集落や城跡を取り込む必要があろう。

②今日、城跡と伝えられる丘陵先端部は、広い平坦地であるが、小段差によって三区画に細分される。それぞれに地権者も異なるので、昨今の造成による分割ではないことが分かる。原点には、城時代の敷地区分があるように思える。町内では、調査済みの焼米城跡が、そうである。山頂の主郭は、小段差によって、二区画に細分されている。

築城時の造成の際に原地形に引きずられて、一律な平坦地が出来なかったためであろうが、調査者が、以前から気にしている土地割りである。元来、城造りには、大規模工事が必要である。客土によって、小段差をなくすことは、さ程難しいことではないと考える。敢えて、それをしないところに、何らかの意味があるのかも知れない。

③城歴については、落城にまつわる伝承(→14頁)がある。これに関連して「姫の隠れ穴」(→第5図・図版12)という大きな岩穴が存在する。集落の北側の岩崖が、オーバーハング状態となり、一部で天井部分が落盤しているために、伝承に相応しい状況を呈する。町内に所在する16城跡の中でも、物語性のある城として注目される。

④丘陵先端から西側へ緩やかに下る斜面に、城跡としての遺構が残っている。丘陵の主軸方向に沿って、大きな削平地が造成され、斜面部にも帯状の小段を見る。土塁や堀切は無いが、削り落とされた各段の法面に、城跡地としての面影が残っている。この類の城跡は、小高い丘陵地そのものが、最大の防禦施設である。

⑤水源としては、登り坂の途中に湧水地がある。城時代も、城の水甕であった可能性が高い。岩崖の窪地から、水が湧いている。

2. 小乙城跡

①文献未記載の城跡であるが、調査の結果、平山城としての遺構がよく残っていることが判明した。小山のようになった丘陵の末端部が城地として選定されている。丘頂は、一定面積を有する平場があり、複数の建物が並列しても、まだ十分な残地がある。大きな特徴は、斜面部に重なる小段である。この小段遺構については、段々畑の跡地ではないかとする見方が一部にあった。昭和50年代の頃であったが、研究が進んだ現在の段階では、完全に否定されている。しかし、今でも異論を唱える人がいれば、この城跡の小段群を見て欲しい。平山城における小段遺構を認識して貰えると思う。さらに、タイプは異なるが、大規模山城の永里城跡にも、尾根筋に小段群があることを付け加えたい。球磨郡上村に所在するので、こちらへも、足を延ばしてもらえればと思う。こちらの方は、高山の尾根筋に造成されているので、戦闘城として、強烈なインパクトがある。

②小乙城跡の小段は、形状も多様で、小規模なものが多い。城跡の調査には、7ヶ月を用したが、測量の際

に、各小段への移動は、容易ではなかった。各段の幅は狭く、しかも、途切れ、途切れにあり、段差面が削り落とされていたからである。上段から下段への移動はともかく、逆の場合は、一苦勞であった。従って、有事の場合、上位から攻撃を仕掛ければ、効果は絶大であろう。小段遺構の威力を、肌で感じた次第である。

③字名や城の規模に加え、地理的な位置から、小乙城跡は、乙城跡の出城もしくは、詰めの城と思われる。ただし、乙城跡が、集落から奥深く入り込んでいるのに対し、小乙城跡は、寺山の集落と隣接するので、不思議な気がする。本城と出城の関係からすれば、逆のような感じがする。城と麓集落の結び付きは、不可欠と認識しているので、なおさらである。

ついでながら、乙城跡は、二郭からなる本格的な平山城である。城の規模では、小乙城跡の及ぶところではない。城跡へは、三宝寺集落の南端から曲がりくねった小道を登り、九州縦貫自動車道に架かる橋を渡って、さらに、奥へ進む必要がある。車で、ゆっくり進んで、少なくとも、7～8分を用するので、徒歩の場合は、30分ぐらいかかるであろう。このことから、乙城跡は、逃げ込みの城である。

④小乙城跡の縄張りでは、小段以外にも特色がある。前述のように、城跡地は、丘陵の末端部が小山をなす所で、裾部には、6個所の張り出し個所がある。内、4個所は、痩せ馬の背の様な細長い形状をしているので、城跡の実測図は、あたかも、ヒトデのような形状を呈する。この様に、派生尾根が生じる場合、他の城跡では、張り出し個所の付け根部分に、大方、堀切が刻まれている。この方面からの、敵の侵入を拒むための不可欠な防禦施設である。しかし、小乙城跡では、かろうじて、一個所に、小規模な堀切を見るに留まる。このことから分かるように、小乙城跡では、全ての防禦施設が小段に集中していることが再認識される。

⑤単郭形式の小乙城跡の様な縄張りでは、短期決戦とならざるを得ない。その意味では、乙城跡の出城、もしくは、詰めの城とする見方は、妥当である。乙城の前線基地や、戦局が最終段階を迎えた際の、玉砕覚悟の戦いの場であったと考えられる。いずれにせよ、小乙城跡は、戦闘城の要素が濃い平山城として位置付けられている。

3. 結 び

①大牟田・植木線(主要地方道)の北側に連なる丘陵地には、東側から西側へ萩原城跡～用木城跡～牧野城跡～小乙城跡～乙城跡～江田城跡が並んでいる。この城跡群の配列は、江田地区の四差路(大牟田・植木線と玉名・山鹿線の交差点)を跨ぐことはない。6城跡の中では、萩原城跡のみが別格である。高山に築かれた大規模山城で、山裾の東西両側には、萩原(菊水町)と寺米野(鹿央町)の麓集落が付随している。

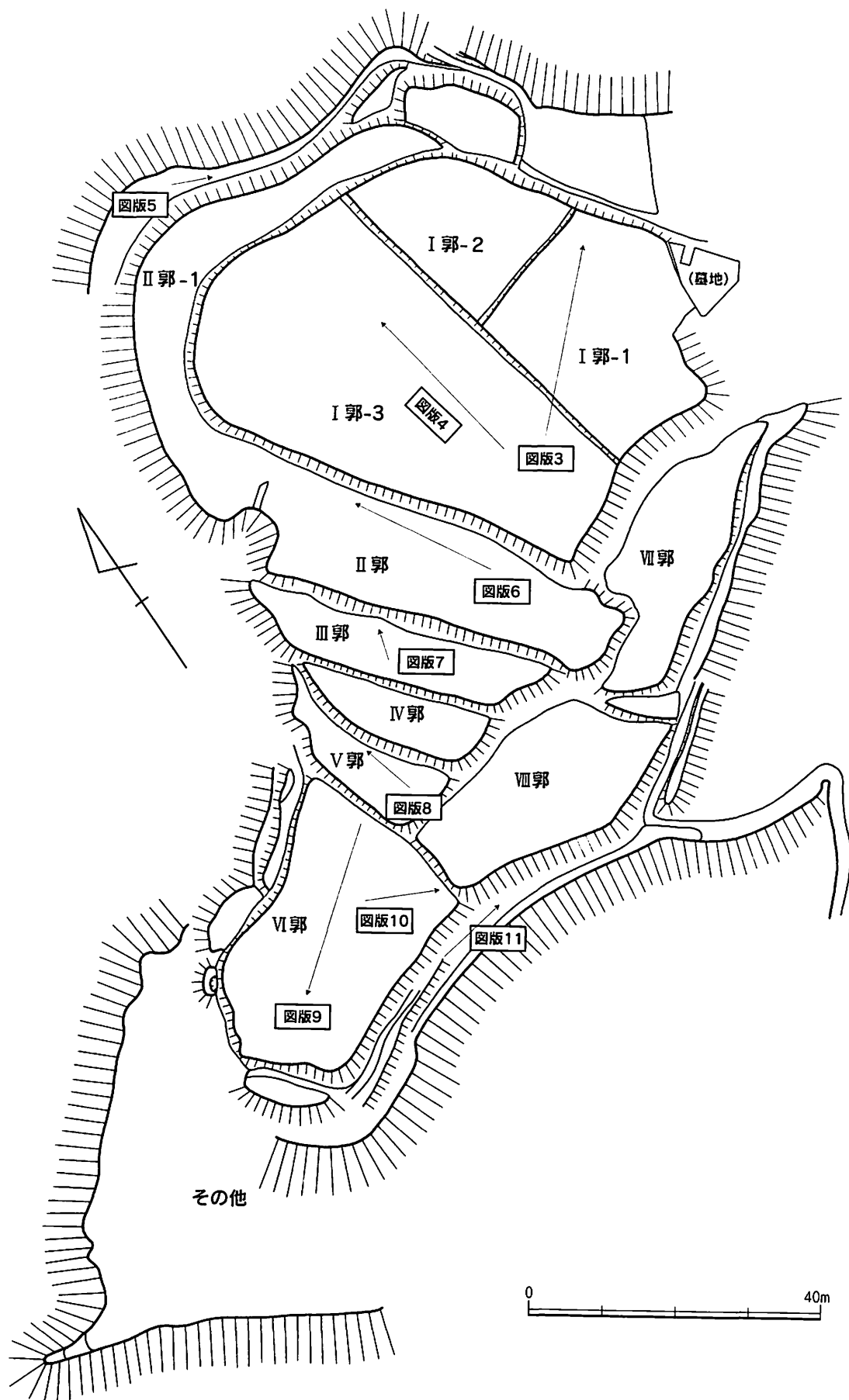
対して、残り5城跡は、全て、丘陵地に築かれた平山城である。これらの城跡は、縄張りに関して共通点がある。防禦施設の中で、最も卓越するものは、小乙城跡に代表される小段である。一方で、他の城跡に普遍的な堀切が、余り、重要視されていないという特異性がある。次年度に調査を予定している乙城跡は、規模も大きい、ここにも堀切はない。築城時期や、築城者に影響を受けた結果とも思われる。

②『蒙古襲来絵詞』の「詞一」の冒頭に登場する「ゑたの又太郎ひていゑ」という人物については、菊水町文化財調査報告第14集『焼米城跡・萩原城跡・用木城跡』で報告済みである。文中で、工藤敬一氏は「『ゑた』は、江田で、その名字の地は、菊水町江田と考えて間違いはあるまい」と推定されている。この江田氏は、玉名郡江田村を本拠地として、薩摩や肥前にも、所領する有力な武士団であったとみられる。南北朝時代は、南朝方に属したが、その後、目立った活動は、知られていない。

以上のことから、調査者は、用木城跡～牧野城跡～小乙城跡～乙城跡～江田城跡の城群の中に「江田氏に關係する城跡が含まれているのでは」という考えを持っている。このことに関連して『蒙古襲来絵詞』には「やいごめ五郎」の名も見える。調査済みの焼米城跡は、焼米五郎の居城説がある。

〔大田・益永〕

写 真 图 版



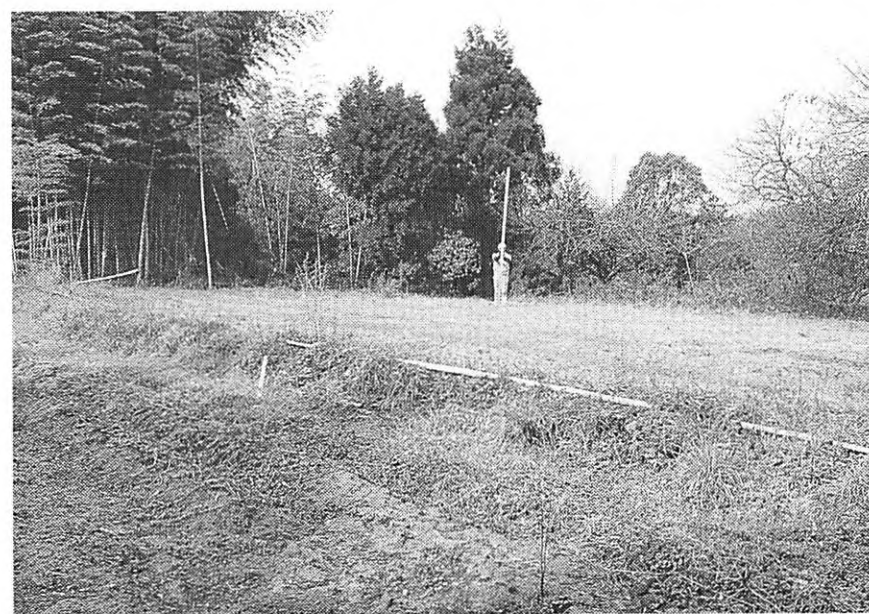
牧野城跡 写真図版撮影位置



図版1〔牧野城跡〕
左：Ⅰ郭－1片隅の墓地
右：高木 輝氏宅
民家の庭先にある高台が城跡という感じ。



図版2〔牧野城跡〕
Ⅰ郭－1から民家を望む。



図版3〔牧野城跡〕
Ⅰ郭－3からⅠ郭－1・2
を望む。境には、小さな段
が付いている。



図版4〔牧野城跡〕
Ⅰ郭-3を南東側から望む。
広い面積を有している。



図版5〔牧野城跡〕
Ⅱ郭-1の北下にある近世
墓地



図版6〔牧野城跡〕
Ⅱ郭の法面に残る削り落と
し。上段はⅠ郭-3。



図版7〔牧野城跡〕
Ⅲ郭の法面に残る削り落とし。上段はⅡ郭。



図版8〔牧野城跡〕
Ⅴ郭を南側から望む。
法面の段差は低くなる。



図版9〔牧野城跡〕
Ⅵ郭を東側から望む。
平坦地となっている。



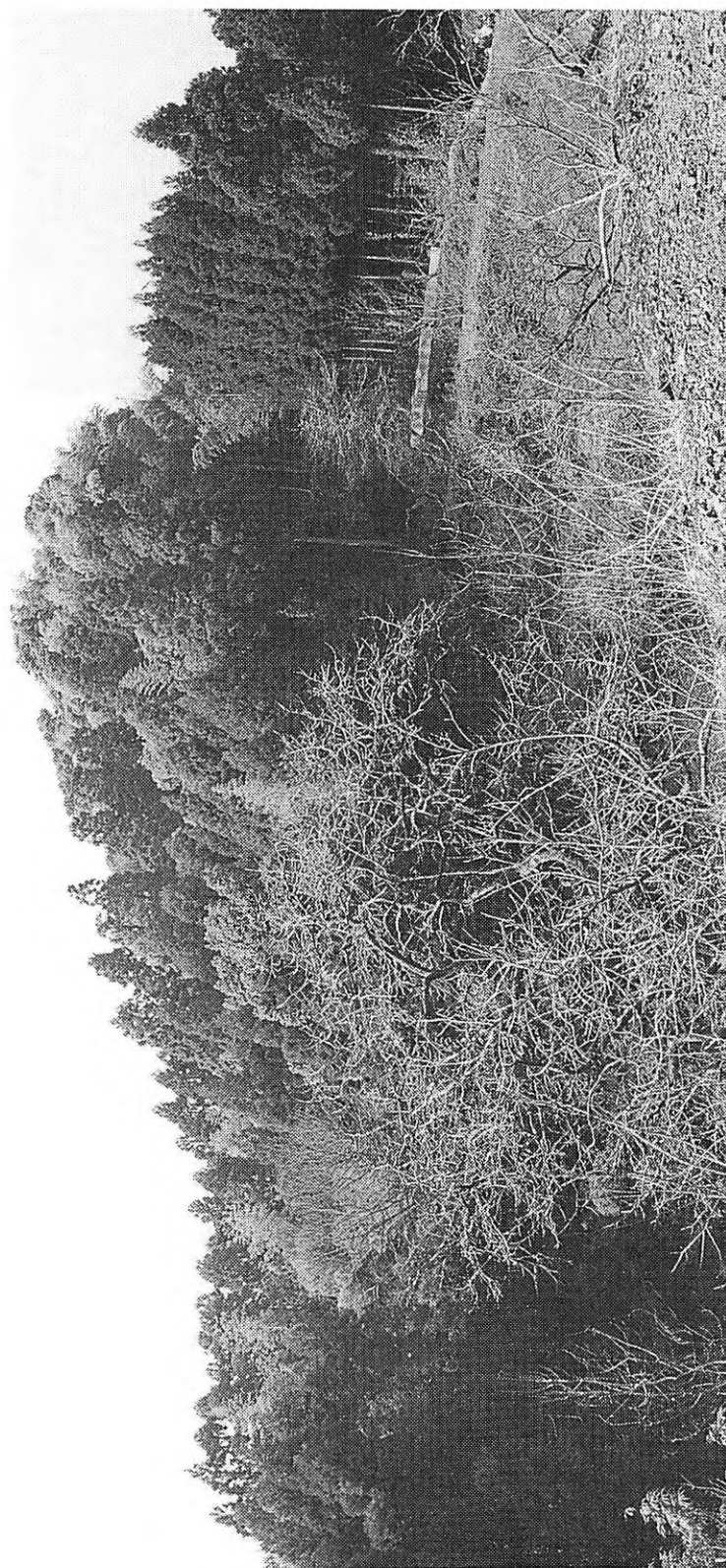
図版10〔牧野城跡〕
Ⅵ郭の南東側を望む。
Ⅷ郭の西側法面は、削り落
とされている。



図版11〔牧野城跡〕
Ⅵ郭の南下に残る小道。



図版12〔牧野城跡〕
(伝)姫の隠れ穴
岩場の崖面にオーバー・ハ
ングの状態でえぐれている。
その中に、落盤して折り重
なった巨石が小穴を形成し
ている箇所がある。

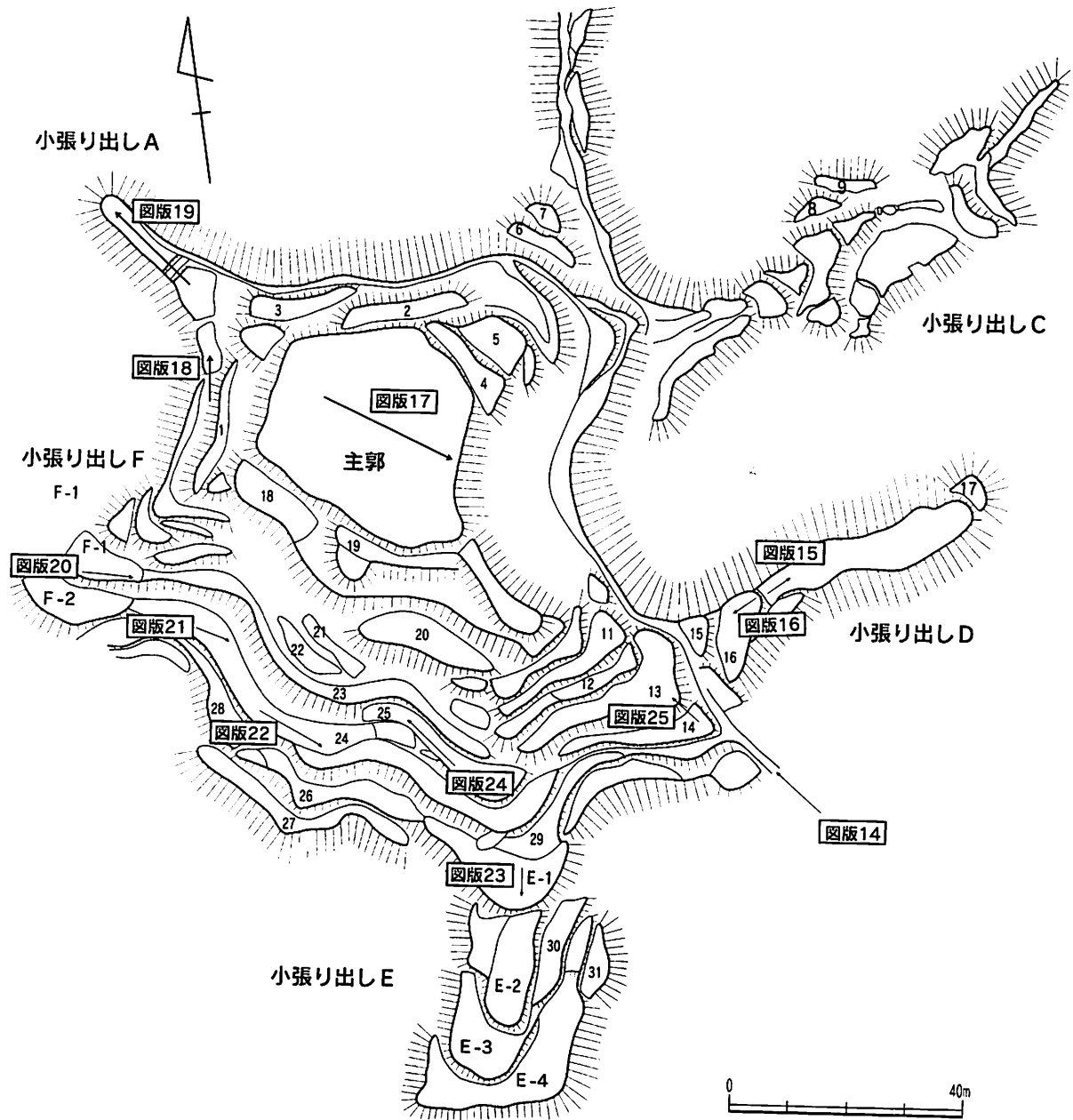


図版13〔小乙城跡〕

城跡を南東側から望む。

城跡地は、桧の植林地と雑木が繁っている。

小張り出しB



小乙城跡 写真図版撮影位置



図版14〔小乙城跡〕
城跡の南東側。城の入口は
墓地となっている。



図版15〔小乙城跡〕
小張り出しDを南西側から
望む。



図版16〔小乙城跡〕
小段15の法面を北東側から
望む。削り落とされている。



図版17〔小乙城跡〕
主郭を西側から望む。一定面積を有する平坦地。



図版18〔小乙城跡〕
右：小段1・2の法面。



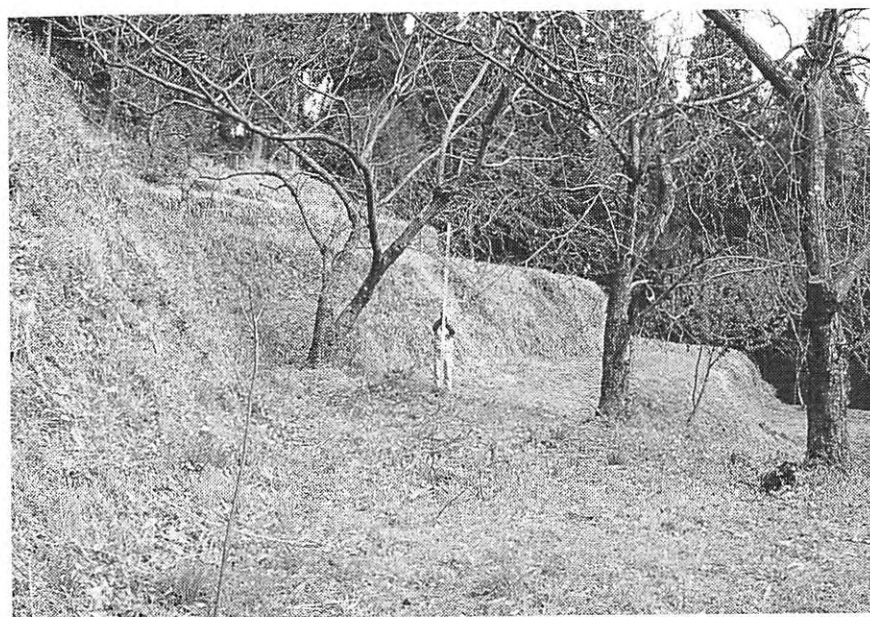
図版19〔小乙城跡〕
小張り出しAを南東側から望む。手前の窪地は堀切。



図版20〔小乙城跡〕
小張り出しF-1から小段
36の北東側の法面を望む。
削り落とされている。



図版21〔小乙城跡〕
小段24を北西側から望む。



図版22〔小乙城跡〕
小段24の東端。



図版23〔小乙城跡〕
小張り出しE-1を上位北
側から望む。



図版24〔小乙城跡〕
小段23を南東側から望む。



図版25〔小乙城跡〕
小段13の法面。

報 告 書 抄 録

書 名	牧野城跡・小乙城跡
シリーズ名	菊水町文化財調査報告第15集
編 著 者 名	大田幸博 益永浩仁
編 集 機 関	菊水町教育委員会
所 在 地	熊本県玉名郡菊水町江田3886
発行年月日	2001年 3 月30日

所収遺跡名	所 在 地	調査期間	調査原因
牧 野 城 跡	玉名郡菊水町大字江田字牧野	平成12年 4 月～ 9 月	学術調査
小 乙 城 跡	〃 字小乙城	平成12年10月～平成13年 4 月	〃

遺 跡 名	主 な 遺 構
牧 野 城 跡	砦と館を兼ねた「総構えの城」 I 郭(3 区画に分かれる)・南西側に下る 5 段の削平地
小 乙 城 跡	単郭の平山城 6 本の小張り出し・丘陵斜面に36個所の小段

菊水町文化財調査報告第15集

牧野城跡・小乙城跡

平成13年3月30日

〔発行〕

菊水町教育委員会

〒865-0136 熊本県玉名郡菊水町江田3886

☎ 0968-86-3132

〔印刷〕

(株)西川印刷

〒865-0136 熊本県玉名郡菊水町江田4345番地1

☎ 0968-86-2028

